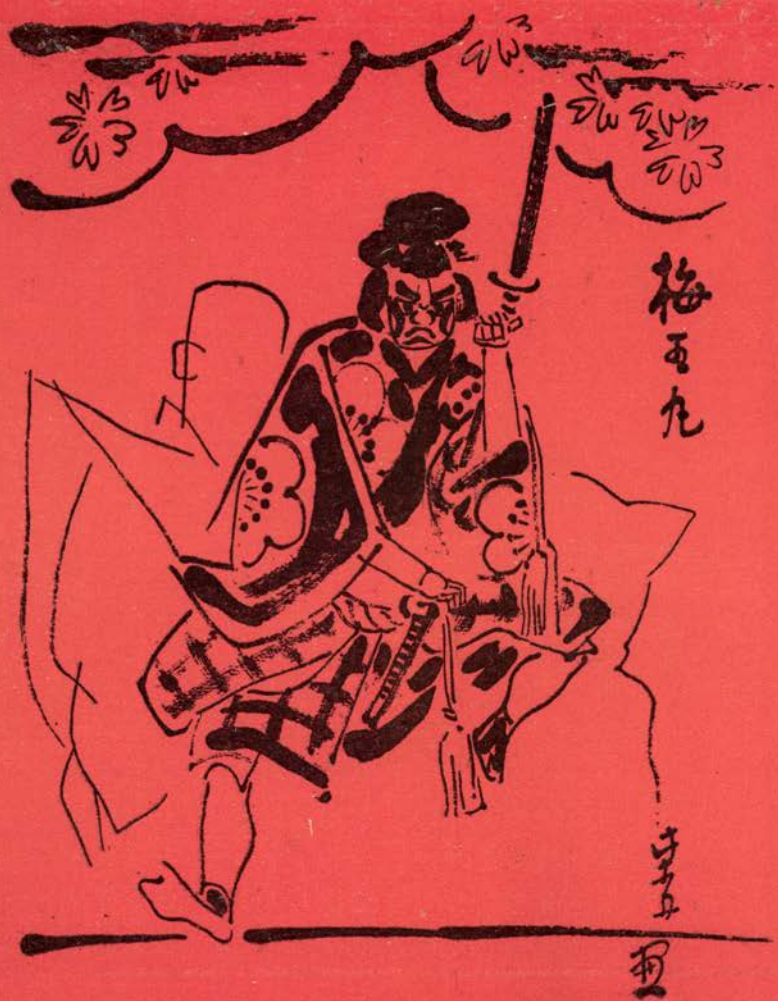


主幹 麻生路郎

川柳新誌

二月號



大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和四年二月一日發行每月一回(一日發行)

川柳新誌

第六卷 第二號

川柳新誌社發行

二月例會

日時 二月九日午後六時半

場所 南區日本橋一丁目交又點

北の辻東入 日本橋俱樂部

兼題 「白髮」三句

會費 三十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌 第六卷第二號 目次

感想・評論

前後左右(二)
川柳とは何ぞや
つれななるまゝに
四段雜記
研究・其他
近作柳樽所感
我觀川柳(一)
珠玉を求めて
川柳旅日記
月評
川柳類題索引
川柳假の姿(二)
漫畫

一路集(募集句)

小使
賣家
手守
本社新春句會
各地柳壇
篠原春雨選
庄万よし選
高橋かほる
太田朝陽共選
橋本二柳子記

梅王丸(表紙)
題字
編輯後記
柴谷柴舟
小出檜重
本社新春句會
路郎、二柳子

創作

川柳塔
岩本素人
三好革郎
高橋かほる
酒井駒人
安井ひろし
水谷鮎美
島田翠峯
中見光路郎
桑原京郎
水田黃彩
中島鐵洲
詫間三猿堂
粒々集
森東魚
長崎柳秀
近作柳樽
松盛琴人
庄萬よし
太田朝陽
岩崎柳路
橋本二柳子
中澤濁水
牧田普門
松丘町二
楊井二南
安西杏三
朝田新水
富士野鞍馬
諸家

【吉例により記念撮影】

(前列)

一杉、嶺月、路郎、紋太、二柳子、桂風、陽、寧亭、鮎美

鳴玉、青二

路(第二列)

つばさ

夢中、ラル

ホ、内匠守

わけし、二

南、突坊

谷三、亂取

萬樂、孤舟

靖弘、里十

九、觀月

本 社 新 春 旬 會

柳狂(第三列)

露斗

鴻堂、吟水

美二郎、悟

空、楓林

汪生、萬

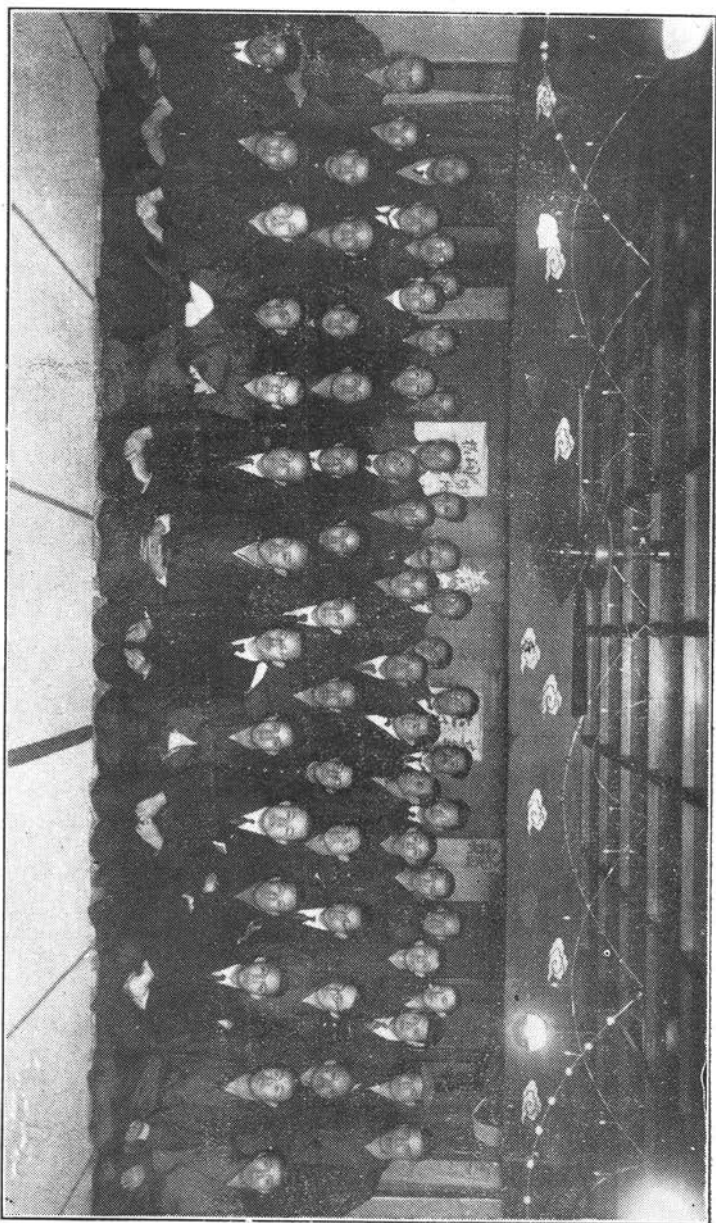
文蝶

梅雨、翠人

雪峰、鶴峯

名芽(第四列)

けん坊、普



列) 無折、紫明、没食子、喜由、善治、愚陀、幸泉、歲白、源坊、秀聲、
香聰、加香、桂枝、双葉子
(昭和四年一月八日於日本酒博覧會にて拍攝(寫眞部提供))



近作柳樽

路郎

選

淋しさにせめては母に叱られん
母の咳心配をして叱られる
信仰を遊戯にしてるおろかしさ
施療院信仰談へ飯のべル
念佛を母にあらはせてものたらす
朝刊へやれ脱黨の身賣りのこ
ゴム靴の底へ電車の動く音
空風の中の中なる女の子
運轉手ゴマカス容を氣にかけず
電燈の笠のほこりも拭きあへず
八ッ橋のこども元祖の札をかけ
玄關へ並べた菊の大家らし
尊しと思ふ打穀の中の父
兄の子を三日月様であやすなり
診察のそれから母を泣かせがち
冬の月一直線に雲を縫ふ
丙午たゞ姑に合はぬのみ
下駄をはく事も嬉しき病上り

螢ケ池 同 同 同 同 島 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 螢ケ池

湖 同 同 同 同 緑 同 同 同 同 二 同 同 同 同 同 同 同 葭
舟 助 竹 舟



さうして暮らすも一生を呑むばかり
 生きんごする煙が物干から見へる
 面會に行く々々の手紙のみ
 人生を超越せよの何のか
 電報に起されて出る冬の月
 靈山へ詣づる俺へ落葉する
 世を捨てゝからは北風苦にならず
 内職の指まで届く白い息
 目覺しの鳴るにも冬がおこつて
 出勤の道に焚火のこかしこ
 あたまから云はれて妻も子も忘れ
 風前のさもしびなるに詩を吟じ
 見舞客馳走になりに来るのなり
 ラヴシーンがすむ身投げのロケーション
 人形で居ねば姿の身のたゝず
 見學の列をきられる交叉點
 まつすぐに吹雪をついて郵便夫
 コップたゝいて唄つてはみぬ
 蠟燭に處女の詩を守れかし
 老ひたりなこのごろをつかふ父
 社長今日現場見て来てち感じ
 寝ころべば浮世も横になつて見
 冬の木こなつて熟柿が一つある

同 同 別 同 同 同 島 同 同 同 京 同 同 同 同 同 同 大 同 同 同 同

府

根

都

阪

二

同 同 兎 同 同 同 花 同 同 同 秋 同 同 同 觀 同 同 同 彩 同 同 同 同 同

無

卓

情

草

月

秋



宮島の杓子が届く秋日和我に似るわが子の癖に眼を反むけ慈善鍋餅になるのも一日きり聖塚の反へせば燃わぬ古帽子食ひ方の遂にわからぬ貰ひ物知りもせず酒もやめさすつもりらし逢へぬ夜は母さしみく針仕事逢ふて来た今日一日の帯を解く看護婦のノックも今は遺瀬なし亡き兄の着物この頃よく似合ひ良縁を逃がしてからの廂髪渡り鳥嶋かへるに海を越わ此の體角力のされることにされいさかいをしてもやつぱり妻の聲大根を切る母の脊はまん丸し君らには合ふまいこんな既製品合格の墨生々し年貢米世辭一つ言へぬ若さの頼もしく夕まぐれ馬は桶まで喰ふつもり霜残る橋を女さすれ違ひ謹賀新年俺れの惡筆大阪に長々さ住むばかりなり正月も今日は二十日か寒い事

同 同 大 同 同 神 同 同 大 同 同 鳥 同 同 近 同 同 大 同 同 豐 同

阪 戸 阪 取 江 阪 中

同 同 露 同 同 重 同 同 一 同 同 湖 同 同 た 同 同 テ 同 同 閑 同

斗 子 杉 山 し ホ 生



見合の娘壽司が崩れて座り替へ
御亭主が代筆をする美容院
客の子につき合つてゐる子が遊び
蛙ふくれるな埋めてかへすよ
からすですサッサ鉢巻お取りなさい
冬の顔が水底に動かす
又来るよなきみ剩錢取つて去に
元且は妾母娘で少し酔ひ
東西屋陽氣の氣味もありはあり
若き日を思ひ意見もやはらかく
子供のを返してやろう菓子一ツ
看護婦に些事にも軽く禮を述べ
蹂躪だなんのき金で事がすみ
いゝ天氣子守の影が鳩へ伸び
ほろ／＼の飯をかつ込む松の内
馬車馬の弱さへ鞭の風を切る
絶對の力に堪へずパンクする
薄給者だからき米屋安くせず
あれ買へばこれも是非要る諦める
仲裁は着更へた妻を連れてるに
譲られた席の温く味に氣がきがめ
むかし／＼或るきころにき編んでる
弟の守マラソンの組外れ

同
大 阪 戸 山 阪 大 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
同 同

同
し 同 同 卯 同 同 草 同 同 柳 同 同 光 同 同 柳 同 同 石 同 同 伴
か 同 同 生 同 同 明 同 同 狂 同 同 坊 同 同 亭 同 同 竹 同 同 内
ぢ



辭職して來たごも知らず爛をつけ
タイピストかゝるご主婦になりすまし
梅やしき只ブラ〜ご睦まじい
家主をば悪く言いつゝ風邪をひき

奉 祝

賑ひを外にガッリン賣つて居る
一廻りして松葉杖天をみる
お暇を仕りますご猪口をあけ
くつろいで居れご巡査の肩は張り
欺かんための化粧にゾツとする
合す掌の願ひは母が病氣にて
旅の戀遂にそれなりけりになり
舌打をしてバナ、屋はまけて呉れ
知らぬ間に家主が變る文化村
失戀の酒きは知らず女給つぎ
うさんやへ這入つて寒さ身にしみる
アナウンサー疲れはせぬが休む也
オーケストラやむミ力の抜けた咳
病み上り日當り褒めてやつて來る
名物にされて舎監で老ひて居る
霜の橋俺より早い跡があり
霜焼の母にすまない湯をつかい
脊の子がそつたまんまで讀み倦さず

松	同	鳥	同	長	同	丸	同	大	同	京	同	大	同	池	同	大	同	尼	同	同	同
江		取		野		龜		阪		都		阪		田		阪		崎			
雪	同	青	同	高	同	柚	同	美	同	折	同	ワ	同	白蝶改量儀	同	萬	同	虛	同	樂	同
緒		水		峰		蘭		一		草		公				樂		白		鳥	



今年こそくはご當坐だけ
環境がさせた不良のまゝに生き
親父のは上にくゝつた年賀狀
下級から見れば生意氣さうに見へ

御大典謹吟

次々も人次々も日の御旗
あお神馬もたいないほご瘦せてゐる
火消靈位置を更へれば虫が飛び
干涉を何處までしたら氣がすむの
久し振り會へば職業尋ねられ
人生觀ベツトの上の七ヶ年
雨降りは互にパスを出し惜しみ
寫眞屋は笑はす事も知つて居り
成功は北濱行きを言ひ出さず
長うなつて土堤下に映る俺の影
自暴自棄投けた帽子を又ひろい
失戀にさへば女は強者なり
待人を待てば待つほご時雨るゝよ
信念は笑はぬ人にされてゐる
自轉車のまゝ話してゐる長い足
エンゲージリングに付いたメリケン粉

同 同 同 同
石川

將軍星
江帆
樂天
素浪

德島 姫島 堺 福岡 蟹ヶ池 同 兵庫 神戸 大阪 同 神戸 大阪 大和 大和 神戶 大阪 須磨

休歩 眠聲 蔓草 假名子 一流 しける 香仙 市公 鯉友 雪峯 風壯 丸葉 翠浪 小蓬 素萌 内匠守



前後左右 (二)

麻生路郎

(二)

川柳を作りたいと思ふ人々でも、又現に川柳を作りたい人々でも、當面の問題として悩まされてゐるのは、What to say 〆 How to express といふことである。

従來の川柳系を辿る人々の機關誌即ち保守派の川柳家が經營してゐる雑誌について、その作品を見るに次のやうなことが云へると思ふ。

それ等の作品は概して云へば What to say といふことについて單に變化のみをねらつてゐて進化するに過ぎない。

しかし、それ等の人達の間に全然進化が無いのではない。或る人々は他の日覺めた川柳誌を購讀してゐるために斯くてはならぬといふ心がいつの程にか根ざして來て遂に模倣的に多少エヴオリューションの道を辿つてゆくもの

である。が、これは夫れ等の目覺めた川柳誌の影響といふよりも寧ろ時代に動かされて知らず識らずに進化してゆくのだと云つた方が、それ等の人々にまつてうれしい言葉であるから知れない。従つてそれ等の作家は多少の進歩を見せるかも知れないが、夫れ等の作家に將來の川柳を期待することは全然不可能だといふことである。

又、それ等の人々は How to express といふことに對しても、常套的な表現しか用ひないのみならず、所謂新しい時代の句は頭から否定してしまつて更に研究をしない。多少研究心あるものゝ努力にして故人先輩の技巧に没頭して自己の藝術的墮落を促進せしめるの具に供するに過ぎない要するに夫れ等の人々は What to say についても How to express にも對しても故人の糟粕を嘗める位が關の山であつて川柳の新天地に一步を踏み出さうといふやうな事は夢想だもしないのである。それがために彼等の作品は生命的に亡んでしまつ

て僅にその殘骸がうごめいてゐるのである。しかし彼等の様式は柳界の一部からさう急激に消えて無くなるものではない。それは今日の月華俳句の宗匠の立場と等しく、全く娯樂園内にあつて、自己の作品の存在に對して陶醉する人々が尙多數にあるからである。しかし、それが悲しき存在であることは彼等は一向氣附かずに終るのである。

然らば新しい川柳系に屬する人々は如何にいふに、それ等の作家のうちでも既に一家をなし、一方の旗頭として畏敬されてゐる人々にして What to say の問題に煩はされ

How to express の問題を全く忘れてゐる作家がある。彼等の熱心力の奔放なる叫びは What to say に全力を費して How to express を無視し寧ろ輕蔑してゐる傾きがある

その地點を漸くにしてバツスした極少數の人々すら How to express の新しい道を開拓することが出来ないで、寧ろ邪道ともいふべき臭味ある川柳様式を生んでゐてそれに甘んじてゐる人々さへあるのである。What to say 〃 How to express といふことは短詩人として最後まで悩みぬかねばならぬ問題である。が、この二つながらに圓熟に近いところまで進展する作家が出現するにすれば、けだし異數の天才であること云はなければならぬ。

(三)

ある感想をものして他人の句を引用する場合、頭に浮んだまゝを其の儘引用する人がある。そして引用した句の表現が、引用した人の表現になつてゐて、引用された人の句を勝手に改作したことになつてゐることがある。甚しい

場合には作家を取り違へてゐることすらある。引用された作家も迷惑なら、引用した人の論旨も其のために丸潰れになつてゐる場合がある。斯うしたことは大膽にいふよりも甚だ無謀だこと云はなければならぬが、案外さうした無謀さが或る種の人々によつて繰返されてゐることを散見するのである。

私は句を引用する場合には必ず原句によつてもう一度ただすことにしてゐる。これは自分の論旨を徹底させるためにも必ずさすべきものだと思つてゐる。

なるほゞ内容は殆んど變らない場合もあるので（多くの場合内容が變つてしまふ）What to say の方面から觀察すれば小さな問題かも知れないが、How to express の問題から云へば實に看過することの出来ない重大問題なるのである。引用した句が若しさうした引用者の誤りによつて改作された時には、改作された句は表現上、原作者の没個性句となり、普遍性を帯びた句となるか、改作引用者自身の個性が表現された句となるから、たゞへ其の句の内容が或る程度まで誤りなく傳へられてゐるにしても、甚だ怪しからぬ結果をもたらすことになる。

一例を挙げると、私が何かの語をしてゐた時に愚妻が氣のひけるものが隣の屋根へ落ち

さいふ面白い句がありますといふ。なるほゞそれは面白い句だ。殊に私の話の中へ引用するには、まことにふさはしい句だが作家は誰だき聞いて見たところ、誰の句か覺わ



川柳とは何ぞや

梶 元 紋 太

◎この題は既に從來多くの人々に依つて説かれたものであつて、今更云々するこの如何に野暮臭いかを思はせられる。殊に現在作句に従ひつゝある人々は川柳の何たるかを知つてゐて盛んに作句しつゝあるのだからその人々に對つてこれを説く事は世に無益な業であらう。それにも係らず私はこの題を掲げて語らうとする。扱何を語るのであらう。

◎或人はこの題を見てこれは至難なことであると言つた。さうだこれは難かしいことであらう。だが又容易なことであるかも知れない。その意味は、これを問ふ人の力によつて難かしくもなれば容易く

もなるまいふのである。一語よく百語を察し得る能力のある人なれば枯華微笑して見せても自ら通ずるものがあるだらうではないか。萬語を以て説かうも解らぬ人には金輪際解らぬ。

◎川柳を説くに最も初歩なものは、その瀟腸から説き起して年代による代表句を示し句の評釋を施すのが最も耳に入り易く萬人に解し易き方法であらうと思ふ。だが茲に標題に就て考へねばならないと思ふことがある。それは『川柳』は何ぞや』といふ言葉の中には過去を説くに止まらず、川柳の傾向を云寫するに止まらず、川柳の一般に通ずる真理も未來への

進路。この三つの指示をも求めてゐるものがあるからである。

◎『柳樽の川柳』は『又』明和度の川柳』は『又』諷刺的川柳』は『等の如く冒頭してこれを説示せんとするならば比較的に準據する處があるだけでも容易さがあられる。然し單に大綱みに『川柳』は』と言ふだけでは廣汎に渉る意味が含まれるので從來でも川柳の論議される場合に於てよく各人の論點が相違してゐることに氣付かず思ひ／＼に自説を主張するばかりで互に意に満たぬことがよくあつたのである。夫だけに『川柳』は何ぞや』といふ標題が茫漠とした感じを與へて解

説の至難さを思はせるものがある。

◎川柳は都會詩である。或は市民詩である。或は批評藝術である。或は通人文藝である。或は大衆的な短詩である。從來いろくな言葉を聞いた。先年某社が「川柳とは何ぞや」と問はれて最も短く答ふるには如何なる言葉がよいか「いふ答案又を募集した事があつてそれにも今は忘れて終つたが」可成多數の答案が發表された。しかし各人各様の答で入したものもなく失敗だつたと思ふ。この種々様々の見解の相違を發表してゐることを或人は群言が人象を探つてゐる様なのだに擲論したことがある。

◎まことに「川柳とは何ぞや」に答へることは川柳の一部しか答へてゐない結果に終るこゝが通例である。この状態を私は水を握るこゝに譬へて見たい。試みに水を握つて見る。ぐつミ強く確かに握り締めた。観じた時は水の大部分が掌の外に洩れてしまつた時で吾人の掌には

濕潤が残るばかり。又水を握らうとする今や握らうとする。その掌の中には確かに水は存在する。實際に握り得やうにしてゐる。が握つて終へば水は外に在る。◎私は私自身に何度か「川柳とは何ぞや」を課して見た。そして答案は其都度與へてある。けれどやがてそれに満足が出来なくなる。又「川柳とは何ぞや」を出掛ける。これを數回繰返して最後に私の與へた答は「川柳は人間である」であつた。「川柳は人間である」何んぞ解つたやうな解らぬ様な可怪しな答であつたらう。これがもう何年か前の話である。それから又私は「川柳とは何ぞや」を索ねてゐるが未だにこれに代る答を得ない今の心持ではもう得られないのかも知れぬとも思つてゐる。が私はまだ「川柳とは何ぞや」をやめないのだ。

◎多くの川柳家は「川柳とは何ぞや」の答を持つてゐる。持つてはゐるがこれを口にするこゝが出来ない。云ひ表すこゝ

が出来ないから言つて知らないのではない。知つてはゐるが言へない。だがそれは句に作つて實際に示してゐる。それで良いのだ。言ひ出た時、既に停滯が待つてゐる。退歩が迫つてゐる。水を握らうとする努力。今將に握りつゝある緊張川柳を知らうとする努力。川柳が判つてゐる言へない。そこに妙味が懸つてゐると思ふ。

◎要するに私なごには「川柳とは何ぞや」に動かぬ斷案を下す事は出来ないのだかと言つて沈つしてゐるでは停頓し退歩する。だから撓まず屈せず努力を續けなくてはならない。解するこゝまで解ける解つてしまつたミして安心してはならない。安心して努力を忘れたミ氣付いた時には又進まなくてはならない。人生不可解ならば川柳も亦不可解である云へる人生と共に川柳は進歩し展開して往かなくてはならない。いゝ親仁になつて停滯してゐる間に人生はずん／＼動いて往く

ではないか。

◎私は前に言った『川柳は人間である』に就て少しく解説を加へてこの稿を終らうと思ふ。川柳とは人間である。人間の躍動である。これが私の答で私の總てはこれを根本義としてゐるのである。今少し言葉を加へて云ひ換へて見る。川柳とは人間の聲であると言つてもよい。人間の聲であるから、笑ひ聲もある。怒り聲もある。泣き聲もあれば喚めく聲、叫び聲、叱る聲、呻る聲、淋しがる、嬉しがる、悲しがる、不思議がる、面白がる、苦しがる、種々の聲になつて現はれる、それが微妙な音律を湛へて一呼吸のものに生れて來た時に聴く者をして感動せしめ深き感銘を與へる。これが即ち川柳でなくてはならない。

◎聲であるから眞實の聲もあれば假聲もあらう。口先だけの聲もある。高い低い太い細い種々の聲がある。私は今の私のまゝの聲を出さうと思つてゐる。私が終

けば驚いた聲を出さう。私が悲しい時には悲しい聲を發しやう。あるがまゝの私があるがまゝに聲を發するのだ。たゞの作り聲や、へつらい聲や人の嫌ふ惡聲だけは出したくないと思つて居る。

◎眞實の人間が眞實の川柳を生むのだ。よい人間がよい川柳を生むのだ。人間そのまゝが川柳になつて現はれるのだ。人間が川柳となるのだ。人間も川柳も同一になるのだ。即ち川柳は人間でなければならぬのだ。私は川柳とは人間である

と思つてゐる。未だこの考へを超へるだけの答へが得られない。

◎これは私だけの小さな考へであるかも知れない。何を言つてゐるのか私と同じ心持になれる人には感じない話であらう畢竟は、私も大衆を探る群盲の一人に過ぎない。探つて探つて探り飽まで私は索ねやう。探つても探つても不可解な川柳の偉大さを頼母しいものに思ひながら索ねやう。この文を読むはさの人から立派な答へを教示されることを待つてゐる。
(神戸支那會席上講話原稿)



つれづれなる
まゝに

岩本素人

丸い玉子も切りよで四角ものもいひよ
で角が立つ

ものゝ言ひやうの極意を訓へてゐる。川柳もやはり一つのものゝ言ひ様だから丸

く言ふ場合、さうく言ひ現はす場合には大いに庖丁加減が必要である。徒然草に、

和歌と言ふものは面白いものだ。百姓が野真仕事をしたり村童が泳を垂らしてゐるのを見て、歌に詠めば面白い、又あの猛獸の猪でも、ふすめの床と言へば、ものやさしう聞へるぢやないか

さういふ玉子に裏書してゐる。そして一節が、いくら適切に表れてゐても、句全體に涉つて纏まらねば何にもならない。徒然草に、右の次に斯う言ふ意味の事が書いてある。

此頃の歌は、一齣や二齣は一寸面白く言ふてある所はあるが、昔の歌の様に歌そのものから流れ出る情緒に缺けてゐる、

この頃の歌と言ふのは大正や昭和の事でない、兼好法師は六百年も前の人だから、少くも新古今集以後からその時代までの事で、昔の歌と言ふのは古今集以前の事を指すのであらうけれども、この頃の歌と言ふ字を、現代に持つて來て、今時

の川柳は、言はれてゐる様な氣がする。こころがこれ位ひでは許して呉れない、またぐんぐんやられてゐる。

紀貫之と言ふ男が「東へまかりける時道にてよめる」前書して「糸によるものならなくに別路の、心はそくもおもほゆるかな（古今集）」といふのは古今集の中でも一番つまらない歌だと言ふ事だが、どうも不可解だ、あの頃の歌の調子は皆こんな風のものが多い、若し此歌をつまらない歌と言ふなら今時の歌人にはこれ丈けのつまらない歌さへ咏めないぢやないか。

と言つた風の様な事が書かれてゐる。ゴツンと參らざるを得ない。少しくさい様だが、もう少し拾つて見やう。

御製にあつめおく言葉の枝ちりもせで、千年かわらぬ和歌の浦波」とありまた「歌の道のみは古にかはらず」と西行も言つてゐるが、これは誠にあやしいものだ。今の歌と古の歌とは、その表面の文字はともかく、内面的即ち詩的價值に於て同日の論ぢやないよ。

と痛烈にこき下ろしてゐる所、川柳家た

るもの、以て他山の石とすべきである。いくら物議りでも學者でも、人の世の情を知らず、人情の機微を掴み得ないものは到底川柳家たり得ない。徒然草に書いてある。その原文は

「よろづいみじくも、色好まざらん男子はいささうざうしく、玉の扨の當なき心地ぞすべし」

句ある
學校を出てしやれが解からず

昭和四、一、二〇

松山支部 記念 川柳大會

日時 二月十一日（午後一時開會）

場所 道後公會堂

兼題 水（五健選）度胸（水樹選）

年頃（麻生路郎選）各三句

講評 「子規に就いて川柳を語る」路耶
記念品 御出席の方へ粗品呈上

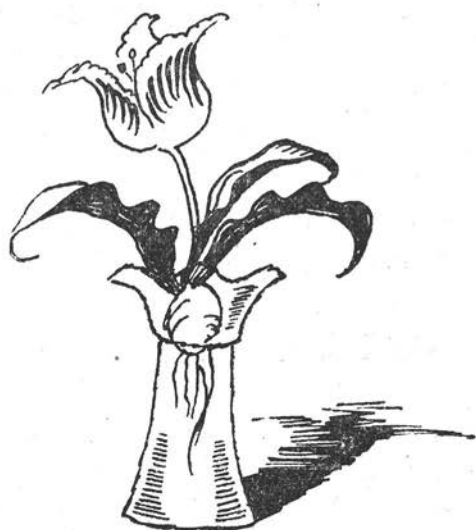
▲尙當日本社より二三名來松の答

松山市外道後祝谷

主催 川柳雜誌社松山支部

幹事 淺井冷々子

後援 海新 松山 媛柳 吟社



○ 岩 本 素 人
 丸鬚が綺麗に結へて噓をし
 引越しに取り残されし寒椿
 年の暮今度の家も寒い家
 この家も空家になるぞ雀の子
 引越して後もかしやを覗く癖
 豊葦原瑞穂國の初日の出
 酔ひ醒めの鏡へ白髪映るなり

川 柳 塔

○ 松 盛 琴 人
 掛取りはつもりばかり聞かされる
 園はれは師走知らずの湯につかり
 ようきいて來いよこ隠居炬燵に居
 掏摸だこは知らずもろたこ女給云ひ
 在りのまま其のまま雑煮箸をこり
 三ヶ日は夢の如くすぎ
 日めくりへまだ元日が残つてゐる

○ 三好 革郎

皮肉なぞ解らぬ人のうらやまし
酒はよし正月なれば酒はよし

○ 庄 万よし

頑丈な博士の北國辯もよし
半玉のチャールストンで賣れるなり
袴持高く十日の年賀狀
歸朝して見れば上役皆代り
仕末してやれど親分じゆんさいな

○ 高橋 かほる

留守番のつまんでも見るころゝこぶ
玄關に暫くみぶなほつこかれ
あんたごこも遊びはるか女連
獨酌の口にやき海苔へばりつき
腕時計何がせくのかよく見られ

○ 太田 朝陽

葬儀場後家ごなつたを皆見つめ
きまつた酒で生きるはかなさ

○ 酒井 駒人

立替へておけば女將に得な客
呼ばれた女將一本つけて立ち
厚司ではよせ雇人ごはちがう

假橋のここから流れゆるくなり
泣かぬのがいつそ淋しい吸入器

○ 岩崎 柳路

女の事も思うて死んだヴァレンチノ
ホネムーン 橙色の月を見る
資木家へほつてやつたる痛快さ

○ 安井 ひろし

障子に陽はまんさん 茶碗洗ふ音
執念の脂ギラ／＼しまひ風呂

○ 橋本 二柳子

何もかもなけ出した跡のかしや札
大阪の空は資本家になつて見
地獄さも云ひ極楽さも云ふて生き
十八が誇り手紙を書いてゐる
門松が遠い隣になつて見へ
できすぎた爛にめでたいお元日
陽あたりで子供ばかりの店を出し

◇ 水谷 鮎美

日も暮れてひゞり路上の魂か
戀へすゝむに碎氷船の如くなり
目薬を注してさびしく炬燵に居
剃刀をあわす尼僧の心かな

善人のまうへを渡り鳥が去ぬ
亡き友の名を掌に書き

風邪ごこち机の上をかたづけ
お願ひをします心の聲に出で
金をみな費ふも若さかと思ひ
金の利息の冷たき夜をかこつなり

◇ 中澤濁水

診察の手を拭ひつゝ軸を賞め
使いたいじんま居た子がごこち行き
山上で見る方角をこり直し
遠縁を羽織の紋で名乗り合ひ
來客へ風邪氣トンビを脱いで出る

◇ 島田翠峯

母親に濟まぬが主義は曲けられず
貧しさを悟られまじき餅を搗き
遠足の土産へ父は兩手出し

◇ 牧田普門

更生の日の樂しみに太り行く
偽つたように看護婦機嫌よし
四十度の熱へ元日やつて來る
空想の中に全快してゐる俺

◇ 中見光路

圓タクへ巣箱のような目白押

赤んぼへ亭主の愚智を言聞かせ
長女次女三四女連れて人目立ち
ふみ見れば膝は去年のまゝ汚れ

◇ 松丘町二

豚の仔も十匹よれば美しい
パパの股面白がつて子がぐゞり
よその子を抱いて錦紗を濡らされる
否定してゐるが圖星だ染めてゐる
接吻を盗んでからの怯へがち

◇ 桑原京郎

橋詰で忘れてしもた早合點
病院を疑ふほごにやみほゝけ
あの頃書いたへのものもへのかな

◇ 楊井二南

年の暮鏡を拭いて叱られる
事務服の包む美貌にだまされて

友の一周忌に

鐘打てき君の笑顔も近よらず

◇ 水田黄彩

繼母に大きく見ゆる足袋の泥
おゝ茗荷生きてゐたのか水をやり

石除けてやれぎ二葉のいたくし
菓子折ミズボンの皺の損なりし

◇ 安西 杏三

たまに來た友に財布を振つて見る
引越してポストを捜す懷手
魂を惡魔に賣つた失業者

◇ 中島 鐵洲

二階なミ貸そかミ女房云ふてくれ
紋付を着た國賓の肩の裾
水道を譲りあふてる御慶なり

◇ 朝川 新水

しよんほりミ飯屋へ露命つなぎに來
蛇の目傘名前を見せぬ娘が一人

◇ 訖間 三猿堂

戀にやつれた高校生 of 髪
迷子のお菓子も皆んな捨てゝ泣き
これからをミ思へばあつけなく逝かれ

粒々集

東京 森 東 魚

引越も暮は夜逃げに數へられ

東京 富士野鞍馬

箱屋にきけばけちな組さん
そのうちの婆アに貰ひかゝつて來
人形なミ列べて藝者二十六
さし向ひそこへ仲居は運ぶだけ
お座敷へ飯喰ひに來る流行妓
遠出鬻繪はがき二枚書きたまい
次の間ミ思ふ隣りも小待合
お座つきは黨派を別に並んでる
斯うしたら安くつきます枕金
三號なるこども承知で惚れてゐる
仲居部屋覗けば萬年筆もあり
さうせ女の仕事棚は落ち
強られ強られて女房三味を持ち

御影 長崎 柳 秀

分譲地 買ひ手の出來る道をつけ
豆腐屋へ聲を貸してゐる鬼ごつこ
借金をやつミ済ました餅の味
海外の視察白髪を氣にしている
情だけ受けては居れずさればこて
灯が點いて廊々の色を見せ



珠玉を求めて

——川柳雜誌第二卷より——

安井ひろし

バーアード、シヨウは劇中の一人物に
『私の滑稽は即ち眞實を語る事である。
眞實を語る事が世界中で一番をかしい事
である』云はせて居る。我等の川柳の
ユーモア一味も此處にあると思ふ。路郎
主幹もまた左の如く説いて居られる。

非凡なれ

——麻生路郎——(第十九號大正十四、八)
『古い句には古いくさみがあり、所謂新
しい句には新しがつてくるさみがある。
鼻もちならぬ點は同じである。深思すべ

きである。要するに我々は生活に即して
眞實の句を作りさへすれば、それでよし
眞實でさへあれば、味も素つ氣もない
句であつても、平々凡々たる作であつて
もいゝ、いふ意味ではない。そこに詩こ
しての韻律、形式、内容の豊かさがなけ
ればならぬ。

常に潑刺たる句でなければならぬ。
非凡でなければならぬ。永久に光るも
の、けだし非凡の外にはない』

柳友よ (第廿號大正一四、二)

一本の燐寸が
燃はつくすまでに
寒さや空腹が
せまつて来る迄に
わたしたちは
一句を遺しておかればならぬ。

最近川柳雜誌の句はむづかしい、考へ
させらるゝ云ふ人があるが、やうやく
眞實な句が認められて來たからであらふ
シヨウの眼は『尋常』だ、眼科醫に云
はれたそうだが、眼科醫の説明によるこ
シヨウの眼は極めて正確に物を見得る例
外に完全な眼で、そんな眼を持つて居る

者は、總人口の一割位しかなく、跡の九割は皆『異常』なのだそうである。つまりシヨウの心眼も、彼の肉眼と同じく『尋常』であるために、普通人と物の見方が違つて、普通人よりも一層よく物を見たのであるこの事だ。(ゆうもあより)つまり川柳雑詠の句が眞實な生活に即した句であるために、云ひ換れば『尋常』であるために『異常』なもの、見方をしたがる人々には、むづかしく思はれるのではないかと思ふのである。

私は路郎主幹の主張こそ『尋常』であつて、川柳は面白いものさう考へ方が『異常』なのだと思ふて居る。

眼高手低

一 麻生路郎一(第十四號大正十四、三)

いつまでも手低を嘆じてゐる作家の前には、必ず進歩があり、手高だなきと思つてゐるが却つて眼低になつて居る。作家は常に眼高になる爲に、いろんな経験を經なければならず、手高になるために自

己の句を充分に燃焼させる事につこめねばならぬ云ふ、自惚に對する頂門の一針である。

句作と評論

一 麻生路郎一(第十六號大正十四、五)

川柳に議論は要らぬものか、黙つて作つてさへるればよいものか、議論通りの句が作れてゐなければ議論してはならないものか、に對し研究なく、批評なきところに發達はのぞまれないから、否、否、叫んで居らるゝのである。批評家作家共に一讀、得るところありと信じる。

荜薺草の一句から

一 永尾宗斤一(第十二號大正十四、二)

君見たまへ荜薺草が伸びてゐる 路郎の句に對する俳人宗斤氏の感想で、川柳の句の歴史より説いて、川柳の擴大に對し驚かされて居る文章だ。今日土の句の句だとか郷土的な句を求めるさか云ふて居るが、我等はすでに、そんな方面には以前から進んでをり今後川柳の擴大にはあくまで勇敢であるのである。尙「荜薺草」の句に就ての路郎主幹の感想が第廿一號(大正十四、十)の巻頭に

載つて居る併せ讀まれるさいと思ふ。

表現と言葉

一 川村花菱一(第十九號大正一四、八)

第四回全國川柳附の高點句である。

言ひ勝つた方もろくく寝かれます
言ひ勝つた方も淋しい雨を聞き
吃驚としては居眠りまた眠り
獅子舞ひは手近な顔の不意を打ち

に對し「云ひまける」「云ひまかす」「いふ言葉はあるが「云ひ勝つ」「いふ表現はない、又「吃驚する」「吃驚させる」「こは云ふが「吃驚させる」なまゝいふ事はない「不意打ち」「こは云ふが「不意を打つ」「こ、動詞として使はれる、事はないこ、文法上の御議論である。

詩は文法を超越するといふ人もあらふが、殊更文法に違つた表現をする事もあるまい。柳人の心すべき點である。

川柳革新の第一義

一 井上劍花坊上(第廿二號大正一四、一一)

川柳を世界的なものにしよう云ふ、劍花坊氏持論の一端である。

一茶の句

一 梧元紋太一(第十五號大正十四、四)

一茶の句を、二字直せば川柳になるなぞいふ暴論に對して、川柳はさこまでも川柳であり、一茶の句は一茶の俳句であるに斷じ、自分は何處までも自分である主張されて居る。世の俳句ミ川柳の區別に迷ふて居る人々必讀の快文字で、紋太氏に此自信ある事は柳壇の爲に意を強ふるに足る名文である。

個人句集に就いて

一石井(蛭子)省二(第十三號大正十四)

(二)

漱石の俳句集や、子規句集刊行の容易でない事を説き、川柳個人句集の出版を慫慂して、注意の數々を述べられて居る

萬年筆縱橫

一麻生路郎(第十二號大正一四、一)

創刊過去一ヶ年の出來事を報じ、前號に書いた田中五呂八氏の手紙のために、同人が退社するなぞ、本社多難の時期であつた事がわかる。

現今大藏大臣の稱ある二柳子君が、當時鳴尾の本社に出社する事一ヶ年百〇五

回、支配人の名を得て居る。思へば二柳子君の努力は終始一貫今日では、勤務以外の全時間を川柳雜誌に捧けて居らるゝのである。深謝の他ない。

柳の床柱

一省二(第十四、五號大正十四、三、四)

下血をしたんでもまだ書き残り吉原へ樓のもで借りに行きの古句から行燈や檣に對する、蛭子省二氏の考證研究的文章である

一句を抹殺するまで

一省二(第十六號大正一四、五)

せつばつまつて糞の日蓮の自句に對し、宗教家の攻撃を受けたため、路郎、柳雨、卯木、久良、諸氏の感想をたゝき、川柳ミ宗教の關係に就いての面白い觀察をされて居る。氏の川柳に對する熱心さの現はれるものである。

川柳界の事ども

一塚崎松郎(第十五號大正一四、四)

川柳家、川柳社機關雜誌、川柳作句會等につき、一般社會に判るよう懇切なる説明がしてある。

誹風柳梅初篇二篇の丁數順序

一岡田二面子(第十二號大正一四、一)

柳梅の丁數の順序、即ち句の順序が各異つて居るのを、博士によつて正しい順序が記されて居る。古句研究家には必須のものである。

八瀬の牛

一西原柳雨(第十二號大正一四、一)

此年の干支に因み、大原女の牛を咏んだ古句に對し句解を施されて居る。

川柳略語解

一西原柳雨(第十三、四、五號大正十四、二、三、四)

い、かんにだまりなきいは内儀也は、いゝかけんの略語ださいふ様に、古句の略語數十句が擧げてある。古句研究家には參考になるものである。

古句研究上の滑稽

一西原柳雨(第十七號大正十四、六)

前記略語解中の誤りを訂正され、わかり易い事がわからぬ滑稽さを書いて居られる。

本事川柳

一武笠山椒(第十四、十七、廿一、廿二)

號大正十四、三、六、十、十一)

古川柳のわかりにくいものゝ内、氏の努力によつて判明せるものを一々考證的に解釋されたもので、七十二句擧げてある。古句研が資料として貴重なるものである。

玩具箱

一 蛭子省二(第十八、九、廿一、廿二、廿三號大正一四、七、八、十、十一、十二) おびんする 三輪の神、常念佛、焦け湯、猿の像、庚申、七の數、道祖神、櫻の花、淡島様、鑼祭、牛、等につき古句を擧げ、考證的に感想を述べた隨筆である『焦け湯』なき私も當時面白く拜見したものである。

柳樽通釋異見

一 森東魚(第廿二號大正十四、十一) 武笠山椒氏著柳樽通釋第二篇に對する氏の異見であつて、第廿二號にまた其異見の異見が木村半文錢氏によつて書かれて居る併せ讀むと興多きものがある。

初代川柳の話

一 坂井久良岐(第廿號大正一四、九)

初代川柳柄井八右衛門の事跡を述べたもので、該傳なる氏の蘊蓄を傾けて居る句評 一路郎、松郎(第十號八正十四、四)

一路郎、古城山、松郎、馬行、霞乃女(第十六號大正十四、五)

現今月評として、每號本誌に異彩を放つて居る句評會を當時に於ても行ふて居るのである。川柳雜誌が、他の柳誌より如何に一步先んじて居るかゞ知れる。

句作上の常套語

一 麻生路郎(第十八—廿三號大正十四 七—十二)

川柳の形を整へ、締め繰りをなし、内容の意味をひきしめるために、或はゆつたりさせるためによく使はれる用語に就て、古今の例句を擧げ懇切に説かれたものである 第十八號から每號執筆されて居る。柳人必讀の參考文字である。

(一)「事」で止めた句

(二)上の句を「事」で切つた句

(三)「居」で止めた句

(4)「る」で止めた句
(5)「よ」で止めた句
(6)「さ」で止めた句
(7)「來」で止めた句
(8)「なり」で止めた句
(9)「也」で止めた句
(10)「て」で止めた句
(11)「けり」で止めた句
第二卷には右の十一項目がある

句になる迄

一 運日莊主人(第十三號大正十四、二) セルロイドの玩具でも拵へるやうな調子で、型に入れた川柳を作つてはならぬの御注意から、本誌近作柳樽の注意を引いた數句を例に講議されて居る。要は川柳さばこんなものだといふ、概念的な作家に墮しては困るを説かれて居る。

埋字

一 運日莊主人(第廿、廿一號大正十四 九、十) 許婚藏へしまはぬ計り也
の武王川の句を、許婚○○○○○○○○計り也
つまる所酒屋がための櫻咲く

を、つまる所○○○○○○○○櫻咲く

まして、○の處に埋字をさせた作何研究の面白試みに對する論評がしてあつて参考になるものである。
右の他二卷には

（真剣に生きたる…安川久流美：

（第十七號大正一四、六）

柳壇無駄話：連日莊主人：（同）

（文壇と柳談 塚崎松郎：（同）

○樂しみより出でて…林田馬行：

（第十八號大正十四、七）

○逢狀：松郎：（第廿一號大正十四、一〇）

○千代崎橋まで 關本雅出：

（第十二號大正十四、一）

○主幹と私：太田徹底郎：（同）

○其後の牛六君：黒木英豆：

（第十三號大正一四、二）

○噫零骨：路郎：（第十三號大正十四、二）

○零骨君を悼む 橋本二柳子：

（第十四號大正十四、三）

○嬉しい事と悲しい事と…柳川洲馬：

（第十三號大正十四、二）

○川柳の如より…林田馬行：

（第十四號大正十四、三）

○川柳禮讃：若林吐露樓：（同）

○天下茶屋偶語：森田輝翠（同）

○俺の部屋：久流美：

（第十六號大正十四、五）

○行末：霹靂火：（同）

○鼻の鳴く夜に…久流美：

（第十八號大正十四、七）

○川柳と生活 安川久流美：

（第廿三號大正十四、十二）

○馬行君の白い色をみる…木村半文錢：

（第廿二號大正十四、一〇）

○新我橋より…庄萬よし：

（第十八、廿、廿三號大正十四、七、九、十二）

○川柳家失敗談…市井山美、高橋かほる

吐露樓、西村山月：

（第十二號大正十四、一）

以上の珠玉の文字がある。

尚川柳漫書はヶの通りでそれぐに面白。

白。

温泉行脚：路郎、島平：（第十六號）

旅の空：吉岡島平：（第十七號）

夏祭二題：吉岡島平：（第十九號）

夢二題：吉田きよし：（第廿號）

時代の産物：柴谷柴舟：（第廿一號）

戀慕悲話二題 吉田きよし（第廿三號）

以上で第二卷の紹介は大體終つた。後進の人々は一讀参考に資せられん事を望む（昭和四年一月十三日記す）

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさわしい簡素な装幀に出来ました。

第一卷及第二卷 各金五圓也

第三卷及第四卷 各金參圓也

第五卷和昭三年分 金參圓也

尙古い川柳雜誌御入用の方には特に左の直ぐでお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

第二號より第四十七號まで 各一部金拾錢

第四十八號より第五十九號まで 各一部金貳拾錢

（但し第九號第廿一號第廿五號第卅六號にありません）

大阪市住吉區杭全町六）三

川柳雜誌社事務所



月

評【前號】

素路 人郎 紋太 ひろし

はないが！。

ひろし提出

山吹の明るさ鶏が来て座り

縁之助

ひろし……此作者は絶へず川柳の表現に、フレッシュさを求めてゐる人と思ふ。此句も作者の生活して居る環境が能く出てゐる、鳥渡俳句の様だと思ふ人もあらふか、山吹の明るさに鶏が来て座つたさ云ふ見方に、川柳的な處があるのだ。

紋太……「座り」云ふ言葉は、中々面白いと思ひます。鳥渡僕等には出て來ぬ言葉です併し、此句を一讀して山吹の明るさがモーツ感じられない様な物足りない心地がします。

素人……僕は山吹の明るさが、大變心持よく出て居ると思ひます。讀み下して行つて耳ざはりのしない、全体が明るい快感の伴ふ句だと思ふし、又郷土的句ひのする素直な感じを受入れられることが出来る。我々都會に生活して居る者からみて、一種のなつかしみと思はせられます、そして座はつた鶏は作者自身の姿の様である。

紋太……大變はめられましたな。

路郎……従來の川柳の穿ちもなく、句として深味もない句であるが、先刻素人氏の述べられた様な、特異の味を出してゐる點に敬服して居る。簡単に云へば繪を其まゝ句にしたさ云ふ様な行方である。

素人……京都派の繪を見る様な句ですネ。路郎……僕に蕪村を川柳で行つた様な面白

近作柳樽 紋太提出

しみぐと妻の心に蹴躓き

左之助

紋太……此句は説明的な言葉があるに拘らず、それが左程に目立たぬ處に其作者のもつ心持に何か心を打たれるものがあるやうに思ふ。強いて奇を衒はばすにすら「さ云ひ流したところ」が誠によいと思ふ。素直な佳句です。

ひろし……ふだん妻に對してあまりに無關心であつた其人が、フト妻さ云ふものを省みる氣持になつた時に、自分と妻と二人の心の間に、思ひも染めぬ隔りの出來て居る事に、おのきを感じた時の氣持の様に思ふ。非常にしみみりとした佳句だと思ひます。

素人……「しみぐ」と「蹴躓き」さ云ふ事はどうでせうか。蹴躓きさ云ふ事は瞬間的の

動作だし、しみぐさ云ふ事は、何にやら斯うモチツト時間が有る様に思ふ。で「しみぐ」と「蹴躓き」が鳥渡おかしい様な氣がする。是は評さ云ふよりも疑問です。

路郎……それは一向抵觸して居ない様に思ふ。つまりしみぐと妻の心に思ひ至る時ハツト自分の心を打つものがあつた。其打つものの状態を蹴躓きの語で表現したものであるから一向差支へがないばかりか、此句の妙味が其處にあるのだと思ふ。作者の内省的な生活がよく出て居る佳句である。

紋太……併し斯ふ云ふ句は、どういふ場合を云ふてあるのか、事件的に、具体的に知らうとする人に取つては、或る物足りないが、あるかも知れぬ。併しそれいふ句によつて具体的に表現せねばならぬ場合もあるが、斯ふした内省的な句の場合には、さうした具体的な技巧を弄する必要は無いと思ふ。是は別に批評で

えりあかを氣にして着せる二度の母

燕 柳

路郎……すつかり古川柳の行方であつて、而も斯ふした句を古川柳に發見しない様に思ふ。「二度の襟」云ふ語は新聞などでよく見うけるが「二度の母」云ふ語には未だ接した事はないが、此場合それが新造語であるものに拘らず少しも頭にはかたらずに讀まれるのも面白いと思ふ、さにかく人情味の横溢した佳句である。

素人「わりあか」さはいものを目つけたものだ若し外の汚れてる處だつたら二度の母が斯んなに利かなくなつたらうと思ふのであるだけ實感の句でない様に感ぜられる。路郎……僕は實感の句だと思ふ。作者さそれほご親しく接して居ないけれども、他の二句が確かに實感である事は、おそらく間違のないところで同時に、此の句も作者の實感でないければ、此作家さしてこれだけのものをずらへりさ作り上げる事は出来ないやうに思ふ。勿論この作者自身が必らずしも繼子であるといふ意味ではない。

紋太……實感であるなを云ひ切る事は、鳥渡危険だと思ふ。此句に對して批評めいた言葉は必要だと思へるほど、それほど分り易いのである。此句の上から見るに、繼母の氣苦勞云ふ事が充分に現はされて居ない、それは何体の古さが思はせるのであらう、襟あかを氣にして着せた云ふ事のみ

ると思ふからである。

紋太……成程……鶏を作者の姿まで感じるさす、諸君の云はれる事が能く判つて来る様に思ふ。僕はたい鶏が来て座つたといふ單なる叙景にのみ因はれてゐたから、山吹の明るさ、それから鶏が来て座つた事と重點が二ツに分れて居るやうに思はれて仕方がなかつたのであつた。

素人提出

いそくと先へ行く妓の手に

椿 雨

素人……椿雨氏の四句の内では、此句が一番優れて居ると思ひます。よく我々が常に散見して居ながら、見逃がして居る情景であるが唯だ鳥渡したスケッチの様に受取れる事が内的描寫が欠けて居る爲めではないか。

路郎……成程四句の内では一番すぐれた句であるが、寫生の面白さを出した句で、此作者でなければ咏へないさ云ふ程度の句ではない。

ひるし……此句は説明するまでもなく、たいして深みのあるものでない。唯だ「いそくと」云ふ上から嬉しさうな藝者の姿を躍如たらしめた點に成功した位だと思ふ。作者の一層御精進によつて、今後の佳句を期待したい。

素人……内的描寫が欠けて居るさ云ふ事はつまり作者の感情が盛られてゐないさ云ふ事なのであります。

路郎……併し叙法はうまい。

さを感じた。

紋太……僕はなんだか不平があつて、仕方がない。句の明るさが、其明るさ云ふ文字の上だけにしか感じられん。明るさ云ふはずにそれを云ひ表はした方がいゝものではないのですか。此ままださ作者が、本當に明るさを感じないのにさう云つて居る様に思はれる。此句のままださ「明るさ」の「に」が入り込んでせうか。

ひるし……「山吹の明るさ」にして説明的に叙すよりも、其場の明るさを感じた事が山吹の明るさで出て居り、其處に鶏がうづまつたさ云ふ表現によつて、確かに句全体に於いて其光景を作者が喜びを以て迎へた時の明るい氣持がよく分ると思ふ。

紋太……「に」を入れないのでしたら、僕だつたら「座る」さで止めたいと思ふ。理由は云ひ得ないがどうもさう思はれて仕方がない。

路郎……僕は「に」を入れたさで止めず、矢張り原句のままの方がいゝ様に思ふ。來てすはりさ投げ出した描寫は、素人氏の云はれた作者自身の姿の反映であり、明るさであり、人びりさであるから、此場合「止め」の弱さにして終う事は賛成出來ない。

ひるし……同感です。

路郎……それから「に」を入れるのも何故いけなやかさ云ふさ、よ、説明的になるからであつて、原句の様に「山吹の明るさ」さ投げ出した言ひ方のほうに其時の情景をハッキリとサラリとした感じで、第三者に受入れしめ

を力強く表はしてほしかつたと思ふ、しかしながらよく分つて居る句であるから、非難はしたくない。

ひろし……同一作者の句に

失戀の氣となつて居候

切れる氣で來たのへ酒を出し
共に切實な作者の氣持が出て居るが、此の句は借り物の様に思へてならない、無論紋太氏の言はれた様に句意はよく分るし、いゝ句の様に思ふ。

路郎……他の句と同じ様に感じられないのは、此句が客観句である爲め或は評者にピンと來ない點があるのかも知れない、句体が古いので、繼母の氣苦等とは思はせられないと云ふ説がありましたが、成程句体は古いけれども、繼母の心理を斯うした見方で表現した作者の手柄を認めない譯にはいかない

紋太提出

(知友)

薬代になる大阪を後にする

眼隠子

紋太……前書のある句へはさばりたくないのだけれ共、疊きに具體的に事件が表現されてなかつても作者の心持が充分に現はれて居ればよいと云ふ意味の事を私が云ひました。此句も其意味にはまる句だと思ひますが併し此句を讀んでみるに何ふ云ふ事件であるかそれが知りたくなるやうな氣が起きます。そして私には充分それを云ひ現はし兼ね

るが、諸君は此句からどんな聯想が起されますか、内容は太變面白い様に感じられますが皆々……ヤア質問ができました。

路郎……では私から始めませう。私はこれで充分其内容が表現されてゐると思つてます。田舎から大阪へ出て來て、一ツ旗揚げつても金の儲かるどころではなく、中々にはけしき生存競争が行はれて居るので、稼げずもかせげとも中々に金が残らない、而已ならず其僅かの稼いだものをも薬代にして終ふ事をつく……と知るに及んでは、故郷の土の生活を思はないではゐられない。其處で此の句を友人に残して大阪の地をあさにする云ふ事を厭んでものだから私は解釋する。非常に具體的過ぎる説明であるかも知れぬが、此短かい十七文字の詩に、それだけの内容を表現した作者の手腕を心から敬服してゐる。

同作者の

生活は寒し十一月の街

と云ふ句と並んで居る事も意義あることと感ぜた、そして此句から前記の如くに感じらるゝ選者の驚嘆すべき頭腦に一層の敬意を表する。つまり所を距て、居ても作者と共にある選者によつて始めて感じ得るのだと思ふ人……僕、非常に、説明を聞いてよく分つた様に思ふ。併し僕は僕として少し違ふ解釋をして居た。と云ふのは此句は望郷心を咏つた句で、慾得に拘らず故郷がなつかしいと云ふのではないのでせうか……試みに少し具

體的に云ふて見ると「薬代になる」と云ふ事は、此人は大阪へ出て、勤めを休んでゐた。さうする内に病らいついて、勤めを休んでゐた。しかしながら大阪にさへ居れば、勤め先きからは若干の手當は這入るので、薬代位にはなるんだが、旅の空で病んでゐる、無闇に故郷が戀しくなる、と云つた風に見ても面白からふと思ふ。

紋太……僕もそれに似たやうな觀察をしてゐました。僕のは身體がだん／＼悪くなつてゐる、そして國へ歸らなければならなくなつた人を、此句から思ひ浮べた。大阪にさへ居たらば薬代位は得らるゝのだが、止むを得ず歸ると云つた人を思はされたんです。兎に角批評以外に下らん事を詮議した事を作者に濟まないと思ふ。

路郎……私は何處までも私の説を主張したい。若し素人氏の意味であれば「薬代にはない」とは「の」字を入れればいゝけれども「の」字の無い此場合では、矢張り稼いでも皆んな薬代になつて終ふと云ふ意味に、さるものが至當だと思ふ。随つて此句は望郷の念が主ではなく、薬代になる大阪が作者の頭を支配したものと解釋するのが最も適切ではあるまいか。

ひろし……つまり薬代のみになること云ふ意味なんです。

路郎……イヤ、薬代「のみ」になること云ふ意味ではない。薬代に「なる」んだ。要するに「のみ」になること云へば、斷定的で強過ぎるので「薬代になる」とである。絶へず病氣に成つては生活が困難になる事を薬代の文字で代表させたのである。卑近な例を挙げ云へば、よく飯代を稼ぐとか、パンを得る爲めにとか云ふあの云ひ方と手法に用ひたのである。素人氏

漫川柳 假の姿 三

柴路 舟郎 畫評

子^こを^を上^あげ^て堺^{さかい}を^を見^みた^か京^{きやう}見^みた^か

閑 生

この句を一讀せん
か。思ひ出は遠く幼
年時代に飛ぶ。
美しきは夢か、非
ず。現實か、にも非
ざる也。ああ。



事業としてブランコなん

ど寺に出来

多聞

経讀むひまに、眼鏡をかけ、
自轉車に乗り、社會事業こやら
んものを營む。これ一つの流行
なり。兒童保護、編物講習會、
曰く何、曰く何、寺院化して貸
席たらんこす。豈ソレばらんこ
のみならんやである。



ばあ

相傘は風呂屋の暖簾ま
でのもの 鞍馬

湯から戻つたら、差し向ひは
必^{ひつぎ}定^{なり}也。一杯^{はい}爛^{らん}けるこ^こも又^{また}日^ひ
課^かの一つか。雨^{あめ}はま^ますく降^ふ
なるべし。



病人に彼岸彼岸とたの
しませ

武子

日に／＼^ひ痩^うせ衰^{おとろ}へぬ。散^ちるは
淡雪^{あはゆき}か果^はた人生^{じんせい}か。聽^きて彼岸^{ひがし}も
來^きるべしとて、そを唯^{ただ}一の慰^{なぐさ}め
の具^ぐさす。





我觀川柳 (一)

川柳は人生詩なり

大衆詩で個性詩也

三 好 革 郎

川柳は人生詩なり

川柳を作る者及川柳を觀賞する者にまつて一番大切なことは『川柳は何ぞや』といふ問題である。この根本觀念を頭に納めずしていくら句作をしたところでそれは姿勢が定まらずに球を撞いてゐるやうなもので、まぐれ當りに佳句が出来るであらうが、その代り撞き損なひ、即ち川柳にならない句が出来る場合の方が多いと思ふ。

私は自分の爲めに私個人としての川柳觀を發表して先輩諸賢の御叱正を仰ぎ私の心の糧としたい。

私は第一に『川柳は人生詩なり』この定義を下したい。その

人生は英雄豪傑、佳人烈婦といふやうな特殊の階級に屬する人々の人生を詩にしたものではなく、日常我々の周圍にうごめいてゐる。所謂平凡なる普通人の生活を材料とし、川柳家が其人生觀、社會觀等の鏡に映じた此材料を詩化して歌つた詩が『川柳』であるを主張したい。自然化學の方でも、第一に進歩したのは、天文學であつて遙かに遅れて發達したのは醫科學である。即ち我々の生活から云へば、最も縁の遠いものが先に進歩し、我々の生活に直接影響のあるものが遅れて發達したやうに文學に於ても始めは神、その次は英雄の事績を詩にし文章にするこゝが第一に行はれ、次いで我々の周圍に働いてゐる平凡人

の生活が詩化され文章化されたのである。故に『川柳』は文學的方面より云つて最も若い最も未だの多い文學なのである。

英雄豪傑佳人婦は百萬、千萬人中に一人か、二人か現はれないものであるが、我々平凡人は千萬人、何億人ゝ居るのであるから最も材料としては豊富な材料である。そしてそれが詩化されて川柳となつた時に、之を讀む者は自分の周圍に居る人々の生活が歌はれ、ゐるだけに、共鳴を感じる點は英雄、佳人の事績の裡ではない、直ちに自分のこゝとして共に喜び、共に悲しむこゝが出来ゝと思ふ。この意味から言つて、『川柳』は大衆詩なりと言ふこゝが出来ゝ。

川柳は個性詩なり

人の一生を時間的に見、空間的に考へて、そこに明暗の二方面が存在するこゝは何人も否定出来ないところであらう、好景氣の時代には世の中が明るく、不景氣の時代には世間が暗い、それはかりでなく、好景氣の時代には俸給生活者は、その初期に當つては、物質の昂騰するのに正比例して俸給が上らないから世の中がいくらか明るくてもその人の生活は苦しく暗くならざ

るを得ない、又如何に其生活が豊富にして、他人から見れば如何にも幸福に見えてゐる人であつても、その人の周圍の事情が精神的にその人をして暗い生活を送らしめてゐる場合も往々あれば、九尺二間の裏長屋に貧しい生活をしてゐても、家庭圓滿に一日の勞働に疲れた軀を家族團樂の愉快な晚餐の膳に楽しく向ふこゝが出来て眞に幸福を感じてゐる人々もある。

要するに人生さいふものは、人の顔が違ふやうに、個々別々に明暗の二方面を表して居る、之は空間的に見た人生であるが、又時間的に見ても、人の一生は春夏秋冬のやうなもので、波の起伏の如くに明るい時代があれば、その反動として暗い時代が来る、その時代を切り抜ければ、又明るい時代が来るといふ様に流動して止まないものである。故に川柳はその時代の時代相が表れて暗い時代には暗い川柳が多く、明るい時代には明るい川柳が多くなるのは自然の理数であるが、又その時代に生息する作者が個性を發揮し、その周圍から明暗の二相を發見して詩化するものと言ひ得られる。この點から川柳は個性詩であることも言ひ得る。(以下次號)



近作柳樽所感

|| 川柳雜誌新春特輯號から ||

近 藤 館 ン 坊

川柳雜誌を頂いて、毎號感じますこゝは、叙法に工夫を努めた痕が見ゆる事です。叙法に工夫を凝らした作句は、他の雜誌にも見わたして、ひゞり御誌の獨壇ではありませんが、御誌に於て殊に著しいのを嬉しく思ひます。

新春特輯號から 感じました所を述べさせて頂きます。

だつこせうにも父の手はかじてる 虚 白

平明なコトバを使つて、或る時の父をよく出してゐます。

だつこせうにも『の俗語に、父の心持がよく表されてゐます。』

而して、『手はかじてる』ミ、其心持通りにいかぬ儘ならぬ狀の表現が確かになつて來てゐます。餘情も充分なのは叙法がいゝからです。

◇ 兒をあけて堺を見たか 京見たか 閑 生
載句幾百の中に類例を見ない、すぐれたる調子から成つてゐます。

誰が作つたのか、詠み人知らずの俗語で、今も尚残つて、人々にうたはれるものは、木曾の御獄でも、坊さん簪でも、潮來出島でも、其の詠懷が調子に伴つてゐるものが多いやうです。『堺を見たか京見たか』いゝ調子です『兒をあけて』の詠懷に伴つた好い調子です。

◇ さて聞けば友も毎日ふきころ手 休 歩
『さて聞けば』田例の多い句語ですが、『友も毎日ふきころ

手」へかゝつて、一脈の新しい生じて來ます。友を思つてゐる其人の亦無聊さもうかゞはれます。

◇

ライスカレーで得られる戀と思つてゐる 蝸牛

いたづらに新傾向めかす句が、斯ういふ叙法を藉るものです。私は夫れ等に眉を擧めます。作意の苦心を忘れて、叙法にのみ頼る無努力をです。だが此句は夫れ等と一様に私は見ません。作者の戀愛觀が籠つてゐる、すぐれた句です。

大たわけ茶見世で腹をわるくする
水茶屋の娘の顔でくだす腹
二十軒さいげんもなく茶をくらひ
茶を五六十杯のんで手を握り

右の四句は古句です。當時に在つてのウエートレスにも比すべき水茶屋の女に對して、柳多留は斯ういふ觀かたに、斯ういふ表現をしてゐます。小洋食屋の戀の雰圍氣の觀かたが蝸牛君に在つては柳多留の糟粕を甜めてゐません。

私は此句が『思つてゐる』の『る』止めでなかつたら、句は一層の緊張を帯びて來ると思ひます。『る』止めは句勢を弱める。私は思ひます、それから又『る』止めは文藝的のニホヒが稀薄だと思ひます。で、工夫の足りない叙法だといふ結論になり

ます。關東の作家に『る』止めの句を作る者が殆ど無いのに、關西の作家からは頻りに多く見せられます。これは俗用語の影響からで致しかたがないのでありませうが、句品の上からは、コトバは國の手形を離れて研究すべきものであらふと思ひます。先づ御社に於て『る』止めに關する關西作家の感想を弘く求めて研究の資料とする順序を取つてもらひたいと思ひます。

◇

新妻一人鉾を下して靜かに居 南 窓

新妻ひとりりの留守に鉾を下してゐる句は、他にも見ました。此句の『靜かに居』で、『閑』を確かに表現したことが類句を免がれてゐます。

此句で見まして『居』止めでない表現に據つたならば『靜閑』が一層強く出るかと思ひます。此句から『に居』の二字を省いても表現の正鵠には影響しないのを見ても、『居』止めの價值は考究すべきものではありませんか。

◇

成る様になれぬは君は短氣だね 湖 舟

全口語體の句です。新傾向が一派が常套的に用ゐる手法です。それを何もケナすものではありません。此句の如く仕上げ

てくれるならば、その頼り易い手法の活用といふものです。全口語體で句を作る人は、此句に潜む構想が句の要素になつてゐる事を考へて下さい。みだりに句型に囚はれてはいけません。

松茸を呉れたばかりにかしわ買ひ 鬼逸樓

此句を讀んだ最初には、松茸を呉れた人をイマ／＼しく思つたのかと思ひました、だがさうではない、決して然うではない松茸を呉れた人、かしわを買つた自分との持は、人間生活の上に於て、微妙な味はひを持つてゐます。活字では説明しにくい生活の微妙味を出すのも、表現の力です。

ごせんがよいと松風ぞ吹く はせを

芭蕉は此句を得て、句意の説明を他に求められて説明する事は出来ないと言ひました。そして捨て難い句として此句を常に記憶の上の方へ出しておきましたが、さうしても此句を附ける前句に出さひませんでした。此句を附けさして満足したのは此句を生んでから三年日ださうです。

此挿話の如き微妙味が句にはあるものです松茸を呉れた人、かしわを買つた自分との間に起つた生活の微妙味。それで此の挿話を思ひ出しました。(完)

◆新誌友 (昭和三年十二月十五日—至四年一月廿日)

村田大池、八尾、坊、島本五笑、幸松四五磨、岩岡久々子、廣岡素郎、以上(松尾琴人) 村田卯之助、谷川部仙湖、山川草木

山路信、以上(安井ひろし) 村田貫一、福田喜作、以上(八木毒仙) 阿波泊水、宮林柳月坊、(以上橋本二柳子) 奥澤義人(清水柳狂) 山本犀藏(庄萬よし) 黒田誠二(伊藤愚陀) 石黒易二(麻生路郎) 藤井勇美(松丘町二) 矢形豊(岩本素人) 山下三郎(長谷川一徹) 奥六造、浅井正、酒井喜一、大熊庄太郎、平澤遙、魚崎長太郎、福井進、戸倉誠司、杉上六一、岡田陽喜亭、杉岡幸泉、大坪九葉、安藤花蝶、北澤袈裟雄、青龍南汀、須山龜一、清水盧白(以上本社務所) 市原豊泉、司城湯坊主、吉田毛無僧、吉田媚柳、木村兎卓(以上(別府支部) 括弧内は紹介者)

(十一頁よりの續き)

てゐませんが直ぐに判ります云つて『川柳雑誌』を引ツくりかへして調べて呉れた。私かのごんたのは、作家名よりも、寧ろ句をたしかめるためであつたが、果して違つてゐた。その原句は

お隣の屋根へ氣兼ねものが散り

であつた。最初に教へてくれた句は大變違つてゐる。句材こそ殆んど違はないが、表現の上に於ては全然違ひ違ひである。『氣兼ねものが散り』よりは『氣のひけるものが』の方に表現上の巧さがある。その表現によつてある皮肉味すら流れてゐるではないか。しかし原作者は『氣のひける』云々の無意識的に改作された句に、改作されて引用されることは好まないだらうし、又甚だ迷惑に感ずるに違ひないそれは表現上に原作者の性格と違つた技巧による表現法が施され同時に内容に於ても違つた含意をもつ句として描き出され全く原作者のキャラクターを失つてしまふからである

四段雜記

蛭子生

例に因り一月號の光
輝抄を、話題とした
い、多分は無慮な
批評になつてしまふ
事であらう、寛洪の量をもつて
お見逃しを希ふ。

女の事は女、デ、小妻に好きな
五句を抜かせてみた、いつも私
は試験的に一應やらせてみる、
「拍子木」誌の紙上互選なども私
共は互々に熱心に續けて居る、
日々主人の作品を見、詩論も聞
くのため、自らそれに傾くのは
止むを得ない、選ぶだのを検
するさ三四分の一致があるのが
常だ、彼に眼があるのではなく
亭主の好きに同化されるのであ
る。

蜜柑から國の話も出る炬燵
子の卒業母の自慢が一つふに
こはばつた顔で數へる札の束
ごの子にもオバーから春ま
叱られて中將湯を呑む夜寒
へ、○印をつけてゐる

吟女さんの「蜜柑から」は、敢て

お正月情緒さ、場合を限らなく
てもよいが、お正月はドコの家
庭でも、蜜柑は買ふ、紀州靜岡
等々、各地の産がある、形に味
に違ふ、箱の上側一と列びが大
粒で、体裁よくなつてゐるなど
も、話の種、そんな事から炬燵
裡で、國の話がはつむ、大には
づむ、ヤハハお正月國樂にして
置きたい、佳什である、私のい
ふ、新しい柳樹中の光輝である
「みかん」の「國の話」「炬燵」
どれもがチェインとなつて離れ
得ない、密接な縁をもつ、句さ
して一字の無駄がない、私に實
演してみた、愉快だった、繞石
翁の「國名物の菓子も話柄や初
菜の湯」より好いと思ふ。

◇

多喜女さんの「紙の束」は、私
は好まない、それよりは
瀧へ来て男の顔が見直され
子が持刀となりぬ二尺さし
俱に真い、後者は類吟があつた
様だ、ネラヒ所である、前句に
潜在力がある、感激に虚偽がな
い、眞實印象を働かして居る難
念の産物でない事がわかる

こはばつた顔で數へる札の束
強い氣になつた化粧の部屋に入る

同じゆき方である、頭から押へ
つける、目安は概念である、こ
う云ふ作がアル種の青年に多い
セツカチ過ぎはしないか？

◇

葭乃さんの「オバー」と「中將
湯」は、鉛筆、ダスイの間に子に
アンテナをはつてつとつと住む
の二句と何れを探らんか、迷
ひぬいた揚げく「女らしさ」の
考慮が先立つたさ、小妻の説明
である、そうするさ私が男とい
ふ反抗的立場に置かれてしまふ
が、私は「鉛筆」と「アンテナ」を
頂く、中將湯は古い、アンテナ
には習慣づけられてゐない境地
がある、現代臭の複雑な内面生
活、人生觀も含まれてゐる、餘談
であるが、先年行脚の際東京の
旅宿で、同宿の法學士の友人か
ら、ラヂオ亡國論が出て、私も
相槌をうつた事がある、ラヂオ
訴訟の第一聲は此の宿から上げ
られ、裁判は續いて居る、ラヂオ屋
と讀書家が、相隣して住むは不
幸な因縁であつた、

同い卒業生をもつ親御達へ、お
祝にいつたら「お陰で一番優等

で出ました」と嬉れしもう、そ
んなに一番は何人もある筈のな
い處に、親の自慢、親の慈愛が
ある、私共は子供がいないが、
そう云ふ話は人一倍興味を覺
ゆる、欣女さんの「子の卒業」に小
妻が事實として共鳴してしまつ
た所以なのである、が、
奉祝の夜を淋しいお留守番
の方が私は優つて居ると思ふ、
お互に心の熱を忘れたつたか
ら、御表の四句中御主張がある
して、これだけでは満足が出来
ない「心の熱」で全的意義は汲み
得ない、私には特種な感受性が
ないのかも知れぬ、江戸座の句
は朦朧体であるけれど、霞の奥
を暗示するサムシクがある、
近作柳樹の初句、左之助氏の
「みんぐさ妻の心に躍躍さ
な」も内面的關聯情緒を更に付
度し得ない、私には更に重荷
な作である、信子句集を評した
時、此の傾向は革新「柳」ガ
ンだと言極言した、教を乞ふ、

拙稿「門松のさ」の中、臺灣の
門松に就て詞友から返事が来た
臺灣人は葬ひの時香竹を眞先き
に持つて行く、香松を建ててあ
るは縁喜上好みののだそうであ
る 一月三日記



川柳類題索引

川柳雜誌 自第一號至第五十九號

安井ひろし 共
越村加香 編
安井欣女 編

一路集

(纂集句)

小使

篠原春雨選

小使は雨に使ひの多いこゝ 琴人
内縁の妻に小使老けて居る 新水
小使の一人娘はタイピスト つばさ
昇格の運動 小使まで参加 秀峯
小使の佛壇にある預金帳 素萌
小使の酔ふこ半等論を吐き 鯉友
小使の寒さを怖れる齡になり 陽意亭
手工室 小使コボシ 掃き 雪峰
小使に負ける宿直替を並べ 伴内
ビール罐 小使器用に活けて出し 柳村
小使の一人に目立つ 國訛り 没食子
校長の家で 小使薪を割り 朝陽
小使が招かれてから坐が白られ 柳月坊
理想ではないが小使止められず 散柳
小使はこんご腹巻編むと言ひ 皎月
抜がらの中で小使年を取り 南金坊
警の字の紋で小使はばがき 丸葉

小使の髭重役にほしがられ 一舟
小使に意見されてる女教員 しゆる
小使の愚痴へ魚が焼けて来る テルホ
ゆきひらに小使だけの飯ができ 光路
小使は他所のボータス間に来る 南窓
悪戯へ 小使到々一喝し 波紋
裁判所 小使までこわがられ ひさし
校長 小使おなじ干支生れ 盧白
巡察が有つて小使くたぶれる 耕民
疳高い聲を小使今日も聞き 一風
閉會のあゝ小使に暮れのこり 秋無草
小使は臆で生徒を追ひ立てる 樂山人
先生の家で小使小さく座し 裸山坊
小使の禿てゐないは白髪なり 雨月
小使に任せ宿直風呂に行き 普天
小使も頭になるこ髻をたて 菊路
小使の身には立派な息子なり 京郎

「川柳雜誌」第一巻から第五巻迄に掲載された、川柳の類題別索引を作つてみた。一ヶ月餘りの短時日の編纂のため題の配列に意の満たぬ點もあり、又區分も徹底を缺いた點があるが、元來川柳の題意が句によつて異なるため止むを得ないにもよる。例へば「鯛」は「魚」であるが食膳に上る「鯛」は飲食物として扱はねばならず、さいつた譯ですから、こゝに掲げた題の區別と相違する句がある場合があつて諒されたい。

題の配列はすべてABC順です。題の下の日本數字は川柳雜誌の號數で、算用數字は其號の何頁を表はしてゐるのです。例へば、逢辰り十八は第十八號（第二卷七月號）第二十一頁の如し。大別して左の通りに區別し順次發表致します。

- (一)人情・風俗・人事・身体・病氣
- (二)職業・職名
- (三)家庭及家族
- (四)衣類・裝身具

小使に聞いて父兄は吃驚し
母ではまだ小使が生きて居り
落ちぶれてゐるが小使歌も詠み
叱られてゐる小使見て通り
小使は自宅で眞んの声になり
末の娘を眺め小使一人酔ひ
式の日が暮れて小使燭をつけ
雪緒

賣家

賣家をはつ買った氣で見てまわり
賣家にあらすはつた板園ひ
造作をしから賣家札を下け
轉々さ入手に渡る妙な家
賣家に波瀾起こせし一周忌
賣家さ知事附り手が今日も来る
賣家の先に道具の市が立ち
賣家の中にさめく近所の兒
賣りに静寂の雨降りつゞき
方針を變へて先祖の家を賣り
賣に今を盛りの柿もあり
家賣つた金帯りなく落籍される
夕映へに賣家はつきり包まれて
賣家を覗けば寒い風が来る
賣家の家主のさころ遠いなり
賣家の背中空地の風を受け
落書を序に讀んさく賣家札
緑之助

特別の用で小使ちさもうけ
吸ひつけたさこを小使言ひ附り
小使の妻さ別れて二十年
(人)述懐をして小使の高笑ひ
(地)小使に行方の知れぬ子ち
(天)御養子さん小使口を入れ
(軸)小使の細工で世帯出来上ッ
春雨

庄萬よし選

賣り家には惜しい木の杵残り
賣り家に折角咲いた花も抜き
偶に來た伯父賣家を知らせに來
賣家をなんのかんのさ米練なり
見付かつた理想の賣家高いなり
思ひ切り荒れて賣家に猫ばかり
暴風雨賣家の塀がこけたきり
賣家の一軒目立つ戸が閉り
賣家に未練の残る間もありて
賣家札祖父を説くのに骨が折れ
賣家の買手付くまで物置場
賣家は井戸のあるのも見せて
家賣つて責任はたす父であり
賣家が心齋庵へ出たさうな
奇怪なる噂間もなく賣家札
賣家に垣から見ゆる草が延び
賣家を月の明りに寒う見る
同柳秀

母性愛	忠義	町内	貯金	近眼	注射	さもり	道樂	毒婦	出尻	出來心	墮落	兄弟	笑顏	不幸	ふられ	不	母性愛
五七	二九	二八	四三	五二	五三	三八	三八	三六	三六	五二	三六	四六	三三	二九	五七	四三	五七
49	29	27	52	46	43	15	15	0	0	49	32	48	10	10	32	32	49
美男子	力惠	智惠	千鳥	調査	忠告	忠告	忠告	忠告	忠告	忠告	忠告	忠告	忠告	忠告	忠告	忠告	忠告
五九	四八	四九	五二	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三
45	67	66	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54

(住 旬)

賣家につゞくは空家ばかりなり
買主が付いたか今朝は門があき
賣家の直ぐ前にある辻便所
旦那もう屋敷を賣つた顔になり
賣家が盟の中で廻つてゐる
賣家の隣り繁昌な音を立て
停年に近く賣家探して居
不始末が明るみへ出る家を賣り
賣家に胸算用の指を折り
遠くから段々近く家を賣り
賣家さ出入りの口がふれ歩き
家を賣る始末を嫁へ打ちあける
賣家さ書いた息十へ博士號
抜けるだけ抜いて賣家叩き上げ
家は賣る噂さを信じ切れぬ家
買はぬ氣の家相が何うの斯うな
賣家の庭だけ雪はまだ残り
家賣つてもはや先祖の墓ばかり
幔幕の波が賣家で切れてゐる
壁中の俳諧をはいで家を賣り
兎も角も持家だけは賣るゝ決め
賣家の戸があいて居て誰かゐる
(人氣に入つた庭で賣家の値が
評 賣手と買手の心情が僅に庭の趣味に
つながる

城 月
柳 村
裸 坊
たけし
田 郎
陽 亭
吉 水
銀 路
美 智 坊
太 路
琴 人
里 魚
突 坊
湖 山
光 路
雨 月
町 二
美 一 郎
松 月
木 偶 人
たけし
件 内

(地)賣家の隅で子供の用をたし
柳 秀

鉢肌保初人放薄發日奉素髭	月合行眼	不	ふ
卷願戀妻み火情展け公兒	給宿列病	足	こ
廿三二二五十九廿六十五十八五	五卅卅五十五	四七五卅五一	五二五
2221194955	554462551116	5052155454	5154
齒秘一人裸畫犯花的花皮煩平人	愚元後行	憤不二人	連
莖密人寢寢人守守肉凡出い	痴氣家水	慨少女	れ
四四四四四四四四四四四四	五五四四四四	五五五五五	五二五
58654754325351514951	4555615451	52585153	53

(地)笑ふ子に子守は鶏を追廻き 柳秀
(天)折からの月へ子守は指をさ 木偶人
(軸)嘘やつたら百圓も子をいが かねる

○ 朝 陽 選

飯たきの秘訣を子守習つてゐる 虚白
電車みる子守子供と別な用 萬年青
子守歌知つてゐる限り唄つてゐる 同
たあぐ泣く兒は子守の唄を聞く 美知坊
氣に入らぬ子守へなぜかよく 吉朗
淺間しい子守の癖が兒にうつり 孤舟
子守今日米の上つた事を知り 葭舟
子守から娘の身持ち世間知り 凡天
子守唄つては故里を戀しがり 銀水
間はないに子守べらく喋つてゐる 同
酒買ひに行く間子守を頼まれる 賀名芽
泣く子とは別に子守の好く遊び 太路
子守連れて夕焼小焼門に立ち 忠八
新しい下駄が子守によく目立ち 鐵洲
兒の趣味と子守の趣味は違ふ 鬼逸樓
同情をされる子守の美しさ 縁之助
老夫婦孫の子守に日を暮し 潮多浪
かくしてた粗忽子守は見付けられ 雪峰
報恩講前の子守も來てゐます

失職は妻に子守を命ぜられ 鯉友
頓着もせずに子守の手毬唄 突支坊
大臣も子守唄から育て上げ 市公
辯解に妻は子守の事も云ひ 耕民
子守もう白粉ほしい年になり 湖山
姉の子はついて唄ふた子守唄 一舟
初孫を抱いて一日暮れてゆき 新水
泣かた子守へ背中の子も泣いて しける
妾宅の子守次第にませて來る 波紋
子守ただ遊びたい盛りなり 柳秀
背の子の不平子守へ反り返り 同
里歸り子守も矢張りよい着物 ワン公
寢附かれて子守に旗は邪魔に 光路
雨の朝子守しよんほり軒に立ち 友三
子守又母戀しさに逃げ戻り 小六
教會の晝は子守が唄つてゐる 田郎
髭面の子守も出來る日曜日 菊路
帽子をば持て子守を追ひかける 清路
戀の文子守貰つて赤くなり 雨月
湯に行つた間亭主は持てあまし 郷川
惡智恵をつけて子守の知らぬ顔 喜由
ふと子守女中の秘密を見付け 江帆

色紙 短冊 畫帳 俳卷 其他

和 正 堂

大坂市東區安土町二丁目

電話本町一〇四六番

振替大阪九一七五番

脊中の子の噓子守の遊びすぎ 町二
 起きた兒へ子守使に暇を入れ 萬樂
 居候子守日課の様にされ 美一郎
 子守今日孤兒の淋しさふ感じ 龜甲子
 窓下にふき聞く子守の品定め 佳水
 子守歸り家一段き賑はしい 南窓
 高下駄は子守の分もきかけられ 秋無草
 暖い日にて子守も草に寝る 松月
 丁稚きの喧嘩子守は負けてゐる 悟空
 鉢巻を締めた子守が尻を向け 巨水
 なじむまで子守賺すに骨が折れ 吐句坊
 裏町の飴屋を子守見け出し たけし
 子守して奉公に出た味を知り 田郎
 子の守へ鳩悠々食つてゐる 黒天子
 子守唄まで變つてゐる文化村 没食子
 子守もう言張る乍り泣く乍り 桂風
 二點句
 お愛想の子守手を替へ品を替へ 吉朗
 初戀をひめて子守はひまを取り 賀名芽
 陽が當る方へ子守の影は延び 太路
 誘惑もなく子守の無事な冬 折草
 弟が出来て子守の日が續き 丸葉

叱らる子守の脊中に泣き寝入る 香仙
 子守唄顔きは別な聲を出し 柳秀
 亭主に子守をさして厚化粧 風葉
 垢切れの子守の足を寒ふ見る 雪緒
 國訛り抜けて子守の髪の艶 高峰
 ねんねこの柄を子守は嬉しがり 竹堂
 奥様の話し子守はまねて見せ 城月
 人込みを子守二重に辛く抜け たしろ
 佳句
 一人兒へ子守をいいて良い暮し 吐句坊
 ビクニツク子守に春の有難し 小蓬
 子守ふき母ありし日が懐しく 湖月
 大袈裟に子守見て來た事咄し 光路
 子守唄歌ふも若い父でした 風流子
 脊中の子を渡してホット草臥き 町二
 子守唄歌ふて母が子に教へ 桂枝
 叱つても子守は池の魚へ立ち 琴人
 (人)子の守をして日曜をい亭主 伴内
 (地)まゝ蚤に子守は悶て居 木偶人
 (天)子守唄今日も忙しく暮かり 青水
 (軸)戀文を知らず子守のたのめ 朝陽

冬の御用品

あれしらす

御代乃花

本舗 伊藤大一堂

發賣 高橋樹大堂

到る所の藥店化粧品店に販賣す



川柳旅日記

北九州から松山まで一週間の旅

庄 万 よ し

別 府

十二月十七日(雨後晴) くれなゐににて
午前十時別府着、詮間三猿堂氏に迎へら
る。別府名物温泉染タオルを販賣して居
られる詮間氏は忙がしい發送の仕事の中
止して木村晃卓氏を呼んで来て下さる。
テーブル持つて炙を据へよと言ひ添へる
ちこ強い風にテーブルの伸びるここ
初對面一時間すりや君こ僕
夜は木村氏宅を煩はすこにして、詮間
氏入浴後、名物海豚は遠慮しますとて
すき焼に地酒の味甚だ佳、詮間氏一杯萬

よし十杯の比なり、按摩車夫は皆電
話を持つて話、市税日掛けの話、近頃
出来たコンクリート製の日本一の大佛の
體内に濁水が溜つて話、なごに柳談の
花を咲かせもう十年の舊知の如くなる
三時から自動車で、地獄廻りを案内せら
れる、海地獄の凄、間渴地獄の壯、血の
池地獄の玄凄、最も觀賞に値する。
概世の形で間渴泉は噴き
海地獄松のみぎりへぶつつかり
鶴見獄は昨夜の雪で、頂上だけ化粧して
る。

二百度か何んだと鶴見獄の雪
も一度湯で温まつて木村晃卓君を訪ふ、
時しも入湯に来て居られる從弟の君三鼎
座して、呑みながら語る『俳柳異同』の
ここ、温泉タイムスに川柳欄を置きたい
ここ、別府市の招待で、十月末に文士連
(久米、佐々木、小島、松崎氏等)の講
演があつたやうに、川柳の講演を開きた
いここ、路郎主幹のやうに木村君も神經
衰弱で、一升も呑んでた酒を止したここ
なごを話さる、話 醋のさ中へ、柳友湯
坊主、曲浦、寶泉、佐春、三猿堂の諸君
が見れて、初對面から洒落さへ交ぜた柳
談、作句に湯の町は更けて行つた。
萬よしの解が晃卓君の安眠を妨けたここ
夥しい。

床の間の達磨へ默す不眠症

耶 馬 溪

十八日(晴暖し) 朝一風呂浴びて二番の
上り列車で立つ。
昨日の寒さこ打つて變つた暖かな日和、

中津より耶馬行乗合自動車に改す、宇佐八幡へ思ふたのを九州第一の耶馬へ振換へたのである。一百二間の青の洞門より、菊池寛の『恩讐の彼方へ』の禪海和尚を思ふのが川柳的でよい、それよりも、乗合の青年紳士、土地の顔役の郷土盛衰の物語りがもつ面白意義があつた。中津の中學から森の町へ、草鞋掛けで十餘里を歸省するの、土曜の晝から、羅漢寺の峠を越へて行く、半分の里程であつた。道路が開け、鐵道が敷けて山持ちが金持ちになつて、藝者を圍ふて、元も子も無くした話、昔からの素寒貧は、今でも山國川を見て暮しるが、物持ちは中津へ出たり、大阪へ出たり、今ちや満鮮地方でやつこそその日を送つてゐる、等々……九州言葉に慣れるのも旅の嬉しさの一つである。秩父宮が登られたといふ道を鎖つたひに、羅漢寺の山門までの絶壁の展望は、山國川、及び支流琴川を廻る一帶の舊耶馬で、饒

秀峰、鮎歸りの瀧なご、ごの山も、ごの水も、さながら南嶺を見るが如き絶景である、羅漢寺の小僧の説明はひびく人を喰つたものであつたが、國寶閣浮提金觀音像には思はず襟を正した。

羅漢寺で暮になりたい 菊日和

柿坂に着いたのは午後三時、山陽の擲筆峰の瀧や、松や、葉が枯れ切つた楓樹を見乍ら、深耶馬への同乗者を求めるために、次ぎの汽車を待つ

擲筆峰こゝで山陽まめが出來

汽車は着いたが極月に深耶馬へ行かうといふ呑氣な客は一人も居ない、森町へ歸るさいふ以前の紳士を誘ふて、三里半の凸凹の山道を乗合の人になる土地人だけに、あれが群狼山、これが烏帽子峰、それ夫婦岩、望海ヶ岳も親切な説明は、地獄に佛の有難さである。一目八景の鹿島館で、上弦の鎌月は、つくね芋の群峰を廻つてゐる。

八景を廻つて月は入り切らず

歸路は、電柱を積んだ荷馬車のために妨けられ豫定に後れて、中津へ出る、上りの終列車に後れるこゝ十分、驛前の宿で旅の通信を書いた。

八 幡

十九日時々雪十倉から電車に乗り換へて八幡の山内知旬川君を訪ふたのは、夕方六時であつた。媛柳誌上でのお馴染であつたが、文通してゐたさいふ間柄でもない、全く出し抜けの訪問だつたにも關はらず、半時も立たぬうち酒杯の間に柳談に耽るさいふの柳友の有難さである。故而笑子先生生前死後の、八幡の柳界の消長八幡支部に於ける追悼句會路郎主幹ミ而笑子先生との舊友の話より川柳雜誌の主張なき氣兼ねない差し向ひの快談、明夜六時に再訪を約して、電車道でお別れたのは十時過ぎ。博多驛前一泊

(以下次號)



各地柳壇

川柳雜誌社 新年句會

一月八日夜

於日本橋俱樂部

本社の新春句會は、昭和四年の柳選を卜する
ように左記多數の柳友の來會を見て、頗ぶる
盛んな句會であつた。席上路郎主幹から
「砂漠の中に立ちて叫ぶ」

と題し、現下の川柳界に對する所感を述べら
れ、本社的主張する、川柳の社會宣傳の一端
が漸やく認めらるゝに至つた事さ、滑稽味の
變遷を説いて「川柳雜誌」の生活に即した、眞
實味のある句によつて、川柳の眞價は發揮さ
るゝものであるとまことに有意義な講演が
あつた。來會者一同は終始靜肅に、川柳の法
悦境に浸り、記念撮影の上十時過ぎ散會した

(參會者)

路郎 桂風、たけし、巨水、五輪、一杉、苔香、瓏
文蝶、孤舟、夢中、萬樂、里十九、善治、亂耽、二
南、黑天子、無折、杏三、鮎美、鳴玉、賀名芽、六
齋、露斗、双葉子、けん坊、沒食子、琴人、ひろ

し、蒼梧樓、惡源太、喜由、吟水、悟空、美一郎
紫明、句三昧、幸泉、つばさ、桂枝、紋太、陽喜
亭、平八、テルホ、卯生、丸葉、梅風、源坊、加香
萬よし、棺雨、鶴峯、虛白、秀聲、嶺月、觀月、突
支坊、靖弘、青二路、鴻堂、柳狂、雪峯、楓林、内
匠守、二柳子。

兼題 紋付路郎選

喜びを分けて、紋付寄り道し
紋付は五ツ六ツを硬う受け
紋付でない焼香のみじめなり
粗服ではあれど紋付禮があり
紋付で坐る座蒲團小さすぎ
紋付へ仲居すまじ酌をすす
紋付へ兒は雜巾を持つて来る
紋付の手に温みある藏の鍵
隱藝その紋付を裏返し
オイ君と呼べは紋付かざがなし
腕節が強く紋付ばかり着る
山菜子も貰ふ紋付塗つて居る
借物の紋付兄は着せられる
柳狂

紋付をぬいで一若汗をふき
五ツ紋肩のすべりも春心地
燭臺の灯から紋付はつき立ち
去る年ばげに紋付を着し事よ
紋付を着てもやつぱりだしなく
芝居裏紋付せんは濟まして呉れ
紋付を左達甲斐に貸して呉れ
紋付に名刺の数が足らぬなり
紋付を黙つてたゞむ午前二時
紋付をぬいでゆつたり茶漬なり
紋付を脱げば人間らしくなり
紋付が無けりや行かれぬなら
紋付に炬燵へあたれさと言へず
紋付も家へ歸れば座をくずし
紋付の紋が氣になる借り衣裳
紋付を着せるに妻は背が低し
黒板へ向く先生の紋がはげ
きりくさ舞ふて紋付風をいけ
紋付でくさる寓真屋念をい
後見が紋付で出るい、舞臺
紋付へ大阪黒い風が吹き
僕の個性が死ぬゝ紋付
紋付で他人のような口をき
おにに飽いて紋付歸つて来
紋付に節高の手が目立つなり
紋付に胸のふくらみ見せて居
紋付の時々のあるの形見にて
紋付の時々かはる東西屋
許された襟に紋付ぬいで居る
紋付へ泣いて來た子を寄せつけ
紋付へ久しう運も廻り來ず
句三昧
ひろし
陽喜亭
觀月
里十九
六齋
文蝶
萬樂
田郎
鴻堂
源坊
琴月
嶺月
つばさ
丸葉
二柳子
貴山
同
鮎美
同
亂耽
同
双葉子
同
秀聲
同
靖弘
同
孤舟
同
太

編み上げの紐へ惡口聞こにて來
出動に冷に切つてゐる靴を履き
一足の靴に親仁の酒の連れ
子澤山靴の要ることきりなり
靴音のはたしてうちの戸を叩き
遠足の靴も疲れたような宿
魚屋さ知れる姿に靴を穿き

二階借窓に七輪、炭俵
春が来てあそこ窓の有るを知り
ヤンデリヤ光る窓からチャレレストシ
窮屈な思ひへ窓も冷めてゐる
退院の朝一つばいに窓を開け
窓窓名をつくれブルティンク
三等はたゞ水だけの船の窓
四疊半窓きつとりと閉められる
いさか廻り道して窓の下
いづこもそれぬ灯が見ゆ船の窓
病院の窓らしいのが動き
窓に月差アラビアの唄になり
硝子窓今日も冷たい朝らしい
病人へ窓開けてやる女客
カーテンが下りて窓にマンドリン
窓からは海が見えます便りが來
友達の声に應じる窓へ立ち
哀しさをかくさして窓へ向き
佳 ハーモニカ窓一ぱと背が揺れ
佳 どうしても思ひ切れ窓を開け
佳 舞踏を慰へに見る窓があり
（袖窓の塵走者だけが取柄なり）

席題 指 番 翁 選

萬よし
繁喜代
明華
重陽子
山都
旅雨
柳骨
鶴足
紋太
嶺月
卯生
同蓬
小蓬
同生
素生
蝶二
番翁
嶺月
萬よし

一月十三日夜於武鹿商店階上

互

稔
選報

スキーの速さ首巻浮いてゐる
スキーマンすべる姿になつてこけ
七轉び八起きススキーの日は暮れる
ストーブススキーの話しはすむ事
滑走は吹雪の中へ消へて行き
鐘話をあけるススキーの手がふるへ
ススキー場一瀉千里と言ふかたち
健やかにススキーに若き日の誇り
スキー場迄を荷物に弱らされ
壽き焼の中へスキーが戻つて來
席題 義太夫 互

悟空 幸泉 素人 佳山
丸葉 悟空 萬樂 伊佐 文蝶 一舟 稔
丸葉 悟空 萬樂 伊佐 文蝶 一舟 稔

席題　あこがれ　萬よし　選

あこかれ
萬
よ
し
選

大 あつけなく風邪を引く二階僧
關 吸入器無理を言ひ言はしこき
小 水道の音が氣になる風邪心地
同 風邪ひいた妻 儘に年が暮れ
同 風邪ひいた女に濕布も似合ひ
同 酒があり風邪を一寸も驚かず
同 女房を叱る子供の風邪 心地
前 かりの風邪の怖る祖母は知り
同 風邪ひいた場所を云々女事務
同 粉薬をそこらに風邪の咳につき
同 明酒飲んだ風邪は床につき
同 淋しさの電話五ひに風邪をひ
同 火事騒ぎ止る風邪と思ひ出し

小 蓬
萬よし
鵜 生
鴨 足
山 都
旅 雨
睡 花
松 月
志 郎
繁 喜
京 代
春 太
紋 太
たけなを

小蓬 萬よし 卯生 鶉足 山都 旅雨 睡花 松月 志郎 繁喜 春代 紋太 たいげな

川柳新語
京都支部
新年小集
(京都)

1

一月八日 桑原京郎報

題
本心。壁。禁酒。春雷。

心に返れば手足冷え切つて

京郎

は忘れて汗の玉が落ち

同

ば疑へ段梯子を降りる

舟々

こゝめは顔の初々とき見たり

同

心を兄に語らずついて行き

翠峯

心を嘘と見られてウエトレス

新水

即い愛想つかしも見透さ

毒仙

なう歸す熱い目

同

らけて壁へ父と書き母と書き

京 郎

人は壁に不平をぶつけて

・同

の言はぬまゝ、白壁に夕暮るゝ

舟々

書を叱らす壁の字を讀ませ

翠峯

に掛けたる丹前の鎧

新
水

重隣の子供起きてゐる

同

丸火鉢指の話は、はすんでる金盃を貰ふた指が缺けてゐる指折れは同窓半生死んでゐる彌陀の指かかへる儘で春になり指さしたはり紙會場近くなり頼母とい指で着炭つかむなり紙幣束へ器用な指を見つめられ算術へもう少と指欲しいなり着せられるマントに指がひつかり掌に残る夕刊賣の指肝腎の話へ指が堅くなり見て居れば指の白さに負けにくる見抜かれた指が火鉢をすべるなり(秀)鮎の骨少しあまた指で抜き兼題 火 鉢 紋 削り屑火鉢へ落とけむたがりカフエーから展れば火鉢冷え切さき出しを焦がしてやつ立つ火鉢上り口大きな火鉢景氣よし上客を逃がした火鉢の底を突き名案に火鉢は輕く叩かれてゐる火鉢抱く心が弱りきつてゐる子供らさ火鉢で話す晩もよこ雪の日や店の火鉢をだかまへる煙草出す方へ火鉢は押しやられ店火鉢五錢が知れぬまじになり人火吐つても何時か火鉢のへば来る(地)頼母子の判を頼んでゐる火鉢(天)酒臭ふなつて火鉢へかこし角力吟 風邪 横風邪藥未だ釣銭へ手を出さず

二 京同睡同繁旅素二萬番蝶小志選蝶同同二同卯同嶺蝶山重萬松華
南 耶 花 代 人 生 南 よし 翁 二 蓬 耶 二 南 生 月 都 子 陽 よし 月 水

(大)あつけなく風邪を引て二階偕
 (關)吸入器無理を言ひ言はしき
 (同)水道の音が氣になる風邪心地
 (同)風邪ひいた姿 儘に年が暮れ
 (同)風邪ひいた女に濕布も似合ひ
 (同)酒があり風邪を一寸も驚かず
 (同)女房を叱る子供の風邪心地
 (前)かりの風邪の怖ろしき祖母は知り
 (同)風邪ひいた場所ば云々女事務
 (同)粉薬をそこらに風邪の咳にも
 (同)淋酒飲んで風邪は床につき
 (同)淋しきの電話互ひに風邪を
 (同)火事騒ぎ止す風邪と思ひ出し
 川柳雜誌社
 京都支部 新年小集 (京都)
 一月八日 桑原京郎報
 題 本心壁の禁酒 春霞
 本心に返れば手足冷え切つて
 我を忘れて汗の玉が落ち
 疑へば疑へ段梯子を降りる
 つつめ顔の初々き見たり
 本心に兄に語らずつて 行き
 本心を嘘で見られてワエトレス
 懸命の愛想つかしも見透され
 すげなう歸す熱い目頭
 いちけて壁へ父と書き母と書き
 いべんは壁に不平をぶつけて
 もの言はぬまゝ白壁に夕暮る
 樂書を叱らず壁の字を讀ませ
 壁に掛けたる丹前の皺
 壁一重隣の子供起きてゐる
 小蓬 萬よし
 鵜足 鵜生
 山都 山都
 旅雨 旅雨
 睡花 睡花
 松月 松月
 志郎 志郎
 繁喜代 繁喜代
 春太 春太
 紋太 紋太
 太極 太極
 下けな 下けな
 京郎 京郎
 同 同
 舟々 舟々
 同 同
 翠峯 翠峯
 新水 新水
 同 同
 毒仙 毒仙
 同 同
 京郎 京郎
 同 同
 舟々 舟々
 翠峯 翠峯
 新水 新水
 同 同
 同 同

席題泥醉佳山

一點句

一點句

選

一點句

一點句

試験室柱時計のきざむ音 賀名芽
試験がすんで本をくつてる 石竹

川柳雑詩社 川柳たかせ會(島根)

新午會 一月五日

伊藤緑之助 報

集る者十一名、同人三人を除けばみな村外の人々、松江より紫吻、大島兩氏を迎えしもの一つ。

兼題 熱

雷相

選

熱さし何うか問へば愚痴を言ひ

紫吻

熱のある額時々母が来る

大島

情熱と情熱とからみ合ふあさま

芙蓉子

向ふから熱して来れば怖く

濁浪

干渉に熱化してゆく労働祭

緑之助

(人)熱愛の二人に物質苦が迫り

濁浪

(地)水枕鳥が鳴いて熱が出る

五苦路

(天)反對派變なところで熱を上げ

旭夢

兼題 雜詩

紫吻

選

古雜詩なき先妻の字が並び

五苦路

理髪屋の雜詩二度目さ知りば知り

奈翁詠

古雜詩髪毛一本見つけ出し

大島

(人)繪雜詩の二冊年子と聞かき

雷相

(地)貸してゐた雜詩破表出て戻り

同

(天)隣室の雜詩も見飽く湯治客

濁浪

兼題 夜泣き

奈翁詠

選

下宿屋の夜泣きへ本を伏せるなり

奈翁詠

今夜又夫の留守を泣きつるなり

緑之助

妻の死に夜泣きする子を持て除し

幸永

やるせなく夜泣きを聞いて病みづ

雷相

小兒科へ夜泣きのことも言ひ添

濁浪

酔ひざめの水に夜泣きの子を叱り 紫吻
席題 目出度いことに關する句 旭夢 濁浪 共選

四ッ角へ来て長持は肩を替へ 奈翁詠
父と母未だうら若く紐落し 緑之助
出産の穢の奥の笑ひ聲 互苦路
嫁ぐ日へ顔を揃はた琴の友 紫吻

兼題 浪人

互苦路

共選

浪人の目に殷様もないのなり

芙蓉子

神様は我が放浪を何んさ見る

曉照

浪人の目にさんらんの廓町

互苦路

急がない旅を浪人して戻り

雷相

浪人へ今日一合の酒の味

同

浪人の父に餘つ程瘦せて會ひ

紫吻

浪宅に酒の切れたる三ヶ日

緑之助

兼題 素足

紫吻、幸永 共選

素足のも来て二次會は更なるなり

緑之助

新調のト駄に素足の儘の跡

互苦路

湯上りの素足へさける寒雪

紫吻

湯歸りの寒ささ別な足の色

雷相

親指に縋帯がある素足なり

旭夢

兼題 蟹ケ池支部正月例會(版)

奈翁詠

維詩社 一月六日 牧田 普門 報

本社より万よし二柳子兩兄を迎へ最近作家

喜良久

も増した支部さて非常に盛會でした。席上萬

潮舟

等にも老より師走の川柳旅行の談やち 武玉川

普門

等に関するお話がありました。

萬よし

兼題 蜜柑

選

一盛も敷讀んでゐる子澤山

紫峰

果太鼓蜜柑の皮を蹴つて出る

一

蜜柑剥く手にはつきりさ冬が来て

湖舟

食客は餅さ蜜柑に三ヶ日

福助

双六の蜜柑に坊や手を伸し

笑蔵

組重に蜜柑の細工よく光り

山本

(客)お隣け蜜柑の皮を乾してある

松汀

(客)一度だけ拔け蜜柑の皮を剥き

わたる

(客)遠足は蜜柑の皮を撒いて行き

湖舟

(客)銅像の前に蜜柑屋店を出し

しげる

(人)隠し藝兩手に蜜柑持つて立ち

市田

(地)一寸する真似で蜜柑を持替

紫海

(天)枕元蜜柑の皮をふみにじり

湖舟

(軸)蜜柑畑今年は寒霜を見る

萬よし

兼題 折詰

二柳子

折詰をたて食ふだけの運動會

奥長

托詰貰ふて不平も言はず年を暮り

市田

本堂で食ふ折詰を詫びてある

柳月

折詰が素直に歸るうらみかさ

波紋

折詰を當にお茶だけ沸かしてゐ

福助

折詰にせめて元日の氣持ちなり

紫海

折詰を持つてだらしのなきを見せ

喜良久

二次會へ来て折詰が邪覺にされ

潮舟

水遣節折詰提げてやつて来る

普門

カフエーへ寄つて折詰いゝ氣前

萬よし

獨り身は折詰を皆あらすなり

みろ

酔眼醜さ折詰をさけてある

同

帛皮へ折詰邪覺なやうに提げ

藏六

折だけを貰ふて下戸はもう歸り

同

満員車折突きあたり

同



編輯後記

▼新年號は社友總出て書いた。みなざりて、面白いで大變評判がよい。新春早々にもう事務所に一冊もないといふ盛況、柳運に恵まれて来たこの證左の一つであると思ふ。それに「大阪朝日」が川柳をみさめてくれたことも嬉れしい。▼大晦日の晩に琴人君がひよつこりさ遣入つて来た。大机よつて答紙を書いてあるところだつた。今年もロンドンの答紙が一つ足りないで物足らなさを感じてゐた。さうなので、まだこれから行くさがあるんで、二人で靜に琴人君を引きさめて二人で靜に呑んだ。なんだかしみりさしたやうな賑やかなやうな大晦日であつた。▼元日に賣文社の事務所へ出たきりで六日の日曜までは靜に家で暮らした。▼八日は新春句會、月評は十二日の晩にひろく居て開いた。いつも飽る山雨樓君が来ない。君は獨チブスで靜養中ださうだが矢張り来る人が来ないさなんだか寂び

しい。一日も早く癒つて顔を見せて貰ひたいものだ。▼十六日神戸へ行つた歸りに芦屋の橋重氏を訪れた。今モデルが歸つたさいふアトリエで夫妻と長男のやつやんと三人で話し合つた。日本座敷も落ちついてエ、ナ。この背後へ日本室を建て、母家を家主へ返へしたら家賃があらいてエ、庭の中へアトリエを建てた上に日本室まで建て、母家を返へすなで虫のゑ、話やなア云つて笑ひ合つた。▲その歸りに神崎川で降りて一庭氏を訪れた。大分よくなつたがまだ眼がすつかりしない。上は見ゆるが下が見えない。それでみんなを寄せて川柳ばかり作つてあるさ云つてゐた。早く癒つて元氣のいいところを見せたい。▼十四日の至誠川柳會の新句會は鳥平、きよしの兩氏にみんなの似顔を描いて貰つた。福引もあつて賑やかだつた。僕も短冊をかいた。▼松山に支部が出来た。發會式には出かけたがいさ思つてゐるが、賣文社の方が創業當時なので、行けるかどうかが案じてゐる。松山や道後には僕の曾遊の地だし、昔馴染の人達もあるで仕事をしなうがら遊心かきり動く。▼高木夢二郎氏の令息一司君が六歳で十二月十日に亡くなられたさう

だ。僕は子どもが死んだ話を聞くことは堪へられない。▼仁川支部の冷刀君が、十八日に突然電話をしてくれた。リボン酒場で逢ひ、バリジャンで呑んでついでその人に逢つたやうな顔をして大江橋で分れた。▼ひろし「香、欣女の三君で別頃の通り川柳雜誌の類題別を編んでくれた。大變な努力である路郎生」▼本社では多數の年賀狀を頂き厚く御禮申上げます。▼新年號は非常な好評で新春早々賣切れになり御註文に對して送本する事が出来ず遺憾ながら謝絶しました。不慮、▼淺井冷刀氏は松山支部の幹事として本社のため御盡力下されることになり別項の通り二月十一日に道後公會堂で創立句會を開演されることになつてゐます。發展を祈ります。▼北濱支部の小幡卓丹氏は三好半郎氏の媒酌で一月五日下關の廣江久子嬢と華燭の典を挙げられたさう。▼本號で發表になる募集句「足音」の選句が編輯日迄に未着です。次號發表の「小使」(篠原春雨選)を發表致しました。▼本社事務所に電話が開通することになりました。番號は「天王寺一六七番」です。▼松山緩柳會では故而笑子の追悼句會を十二月廿七日に營み同時に松山支部の解散式を行

はれました。▼二月號の編輯は路郎生幹、ひろし、夢人、素人、革郎氏と私の六人でいたしました。▼新年號の會報編輯松愛川柳會の肩書に川柳雜誌社支部の文字が遺入つて居りましたが町二氏報であつた爲編輯部で間違へたので松愛川柳會と川柳雜誌松江支部とは別でありまして訂正いたします。(二柳子記)

喜田飯山氏は香川縣綾歌郡坂本村へ△森東魚氏は名古屋市東區新出来町一丁目三五△宮武外骨氏は東京市本區龍岡町一五△堀楓林氏は大阪市天王寺區烏ヶ辻町七四△岩崎内匠守氏は大阪市港區一條通三丁目三九へ各轉居

◆改號
古林ワン松氏は俊烈△大熊庄太郎氏は秀聲△宮村素浪氏は柳月坊改號

◆訂正
十一月號四二頁糸屋町句會の「しつかりと握る心になつてゐる」は多喜女でなく鮎美の句
十二月號本社例會の「梅白う若侍の母へ文」は
梅白う若侍の背にすれ 鮎美切腹の若侍へ母の文 太閤
新年號二十一頁「どの子にもオバ」を編んで春を待ち」(霞乃)

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたい。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の原稿紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第六卷第四號課題

二月五日締切
(各題十句以内)

女 優 川村花菱選
土 福田山雨樓選
櫻 中野柳陽共選
松丘町二

第六卷第五號課題

三月五日締切
(各題十句以内)

雨 蛙 相元紋太選
寢 臺 矢田冷刀選
心 西本三笑共選
北山悟郎

每號募集

▼近作柳梅(廿句迄) 麻生路郎選
▼各地柳壇(會報)
▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社告

○社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號 一部 金參拾錢
新春特輯號 一部 金五拾錢
八月特輯號 一部 金四拾錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)參圓八拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和四年 一月廿五日印刷

昭和四年 二月 一日發行

第六卷 第一號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪市内西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸二 郎

發行所 大阪市内西成區千本通五丁目七番地 柳 雜誌社

振替大阪三五一四番

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六七番

店書捌賣

(大阪) 大賣捌 サクラヤ書房。(明文堂 其他市内各書店)
(東京) 仲見世 玉森堂(神戶) 米田、後藤、實文館
(函館) 石塚 (石川縣小松) マコト屋 (京都) 三宅

川柳雜誌社關係の人々

(いろは順)

賛助員

末弘 嚴太郎

池澤 樂居

大田 弘雄

岡本 一平

西原 藤彦

片岡 直方

大島 三郎

嘉納 純二

岡田 三郎

田中 香二

川上 三郎

長崎 柳秀

川村 花菱

國枝 史郎

吉岡 鳥清

藤本 卯之助

吉田 鳥清

藤井 井木

武笠 山椒

小井 清司

安川 久美

道頓堀支部

大阪市南區新我橋南詰

天満支部

大阪市北區北森町三十二

濱寺支部

大阪市外高石町羽衣

神戸支部

神戸市花隈町九六

山口支部

山口縣山口町石原小路

東京支部

東京市芝濱松町一ノ十五建興商會

函館支部

函館市青柳町五〇

仁川支部

朝鮮仁川仲町二丁目八

松江支部

松江市外川津野津方

松江支部

松江市外川津野津方

松江支部

松江市外川津野津方

松江支部

松江市外川津野津方

松江支部

松江市外川津野津方

小出 楯重

高橋 かほる

木村 半文

高橋 柳

柴谷 春柴

矢野 好冷

森子 省二

井里 好冷

相元 紋太

山田 好冷

特別社友

北山 好冷

岩崎 素柳

伊藤 燕

原本 史風

猪野 燕

德田 双三

石川 雙葉

太田 朝陽

長谷川 柳

龜井 花童

友田 柳

石川縣小松町猫橋詰

高知市本與力町

高知支部

大阪市此花區龜甲町二丁目七九

梅田支部

大阪市外阪急沿線乃根山養所内

盤ヶ池支部

金澤市八幡町五三

金澤支部

大阪市東區系屋町二丁目七

系屋支部

和歌山縣田邊町幽靈松下

田邊支部

島根縣鏡川郡今市本町

鏡川支部

豊橋支部

豊橋支部

松山支部

松山支部

松山支部

松山支部

松山支部

松山支部

松山支部

松山支部

松山支部

高橋 白猿

青山 新水

中川 左馬

水田 美彩

中野 柳陽

田代 二

中澤 光路

森田 笑亂

中見 鐵洲

橋本 柳子

中川 馬郎

安井 合舟

淺井 冷々

松生 好生

楊井 二

松生 好生

松丘 門

松生 好生

越村 加香

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

編輯局

(特別社友)

橋本 柳子

安井 合舟

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

松生 好生

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよ／＼讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にさつては、誠にありがたひ譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことばかりう。

(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本 全一冊

定價 五十錢 郵税 二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にビツタリ合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて来る



灘 津 攝

嘉納合名社會釀

川柳とは何ぞや——の數萬言を聴くよりも本書を繙
け！實に愉快に而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

川柳 漫畫 累卵の遊び

定價 壹圓 (送料拾錢)

實に氣持のいい本だと言はれてゐますのでよろこんでゐます。皮肉で面白いのでよく贈物になります。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。(葎乃)

内容概目

川柳 累卵の遊び
漫畫 日月は輝く
大衆と共に
麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博したる川柳漫畫集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により収録したるもの——。
「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が好評を加へて初心者の參考に資したるもの——。
「講談俱樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が好評を附加して一般讀者の興味を湧かしたるもの——。

◇軽い讀物として 紅茶の後で、電車の中で……

大正十三年二月三日發行（毎月一冊、一月發行）
昭和四年一月二十日印刷、昭和四年二月一日發行

川柳雜誌 (第六十一號)

定價 三拾錢

七の五通本千區成西市阪大
番五八五二五阪大替振

洞朽不

三二八寺園高町並杉外市京東
番八八七六七京東替振